

教職大学院Newsletter 97

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻教職大学院Ne wsletter編集委員会 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10098/10274 |



教職大学院

Newsletter No. 97

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2017.5.13

多様な境界を越えた展開を実感した実践研究福井 ラウンドテーブル 2017 Spring Session

福井大学教職大学院 准教授 岸野 麻衣

実践研究福井ラウンドテーブル 2017 Spring Session は、史上最大規模の参加人数で開催され、その大きな特徴は多様な境界を越えた展開を見せたことであった。

3日間の申込名簿登載者は871名（うち福井県内515名、福井県外331名、外国25名）であり、Student Poster Session のみに申込なしで参加した保護者や地域の方約50名を加えると参加者は920名を越えたと思われる。

17日のプレセッションには35名の申込者があり、当初予想していた教職大学院関係者の参加にとどまらず、学校現場からの参加者も多く集まり、多様なそれぞれの現場におけるプロセスコンサルテーションについて協議がなされた。

18日の中等教育特別フォーラムは151名、Student Poster Session は179名、保幼小教育フォーラムは131名の申込があり、おそらく当日参加者の参加もあったと思われ、会場はいずれも満席となった。中等教育と保幼小教育という様々な学校段階を対象としたセッションを行ったことで、これまでになく多く、幼児教育にかかわる実践者が参加したことも特筆すべきことである。また、恒例ともなった Student Poster Session には小中高校の児童生徒のみならず、保護者や地域の方も多く参加し、ここにも参加者の多様性が見られた。保護者からは大学で堂々と発表をする子どもたちの姿に感銘を受けたという感想も聞かれた。午後から様々な領域分野の Zone (A: 学校, B0: 国際, B1: マネジメント, B2: 学部教員養成, C: コミュニティ, D: 授業研究) に分かれてポスターセッション、シンポジウム、フォーラムが開かれ、計602名の申込が

あった。このうち ZoneB0 (国際) は、「福井型教育の日本から世界への展開」キックオフフォーラムと題され、秋に福井大学教職大学院で3週間にわたって行われた JICA 研修プログラムに参加したアフリカ諸国の先生方にも来日いただいた。

夕方には福井大学教職大学院が事務局を兼ねる「省察の実践学会」の発足の会合が開かれ、質の高い実践研究の実現を目指す実践研究者が80名近く集った。

19日は、440名の参加申し込みがあり、101グループが編成された。そのうち8グループは英語、1グループはスペイン語で報告・協議が行われるテーブルであった。各グループとも3名の報告者がたち、100分報告2本、60分報告1本でじっくりと実践を語り、聴き、考えを交流することができた。

このように、これまで以上に幼児教育の参加者が増え、小・中・高校の児童生徒やそこにかかわる保護者や地域の方々の参加が増え、幅広い分野から多様な立場の参加が広がった。それに加え、今回はアフリカ・フィリピン・インドネシア・リトアニア・アメリカ等諸外国から25名の参加者があり、「実践し省察するコミュニティ」が国境をも越えて、大きく展開していく可能性を感じたラウンドテーブルとなった。

目次

| |
|---------------------------------|
| 巻頭言(1) |
| 特別企画フォーラム(2~7) |
| 保幼小フォーラム(7~10) |
| Students' Poster Session(10~14) |
| Zone ABCD(14~33) |
| ラウンドテーブル(36~41) |
| 次回予告(42~48) |

Session 0.1 特別企画フォーラム

社会に開かれたイノバティブな中等教育の挑戦

「社会に開かれたイノバティブな中等教育の挑戦」を終えて

財務省大臣官房地方課 課長 重藤 哲郎

「財政教育プログラム」は、つい2年ほど前に始まった取り組みです。全国の先生方やPTAの皆さんにご理解いただき、一緒に考え、試行錯誤しながら作り上げてきました。財務省にとっては、これまでやったことのない未知の領域です。そして、いざやってみて、とても大きな手ごたえを感じています。

でも、それって独りよがりな自己満足じゃないのか。学校の先生たちや、なによりも生徒さんたちから、ちゃんと評価されているのだろうか。

今回、フォーラムやそれに引き続くセッションに参加させてもらい、その懸念は見事に吹き飛びました。

プログラムに参加した生徒さん達は、私たちの期待・想像をはるかに超えて、財政を「自分ごと化」し、若者らしい感性で、将来のことを考えています。財政

について「教わる」のではなく、財政という素材を通じて、立場や世代によって様々に利害が交錯する世の中の構造、そして、国や自分たちの将来を、能動的に、考えています。

もちろん、そこには、生徒さんの自主性や感性を引き出す、すばらしい先生たちの存在があることも、言うまでもありません。本当にありがとうございます。

これに力を得て、私たちは、全国のできるだけ多くの生徒さんに、本プログラムを通じて、考える素材と機会を提供していきたいと思っています。全国の先生方からのオファーを待っています。フォーラムの中で先生も仰っていたように、本プログラムはタダ（無料）ですから（でも、タダで開催できるのは、私たちの給料が税金で賄われているからだということも、お忘れなく）。

「財政教育プログラム」について

財務省主計局調査課 課長補佐 海老原宗貴

この財政教育プログラムは、将来世代である小中高生を対象に、日本の財政の現状を踏まえ、持続可能な社会の形成や国民福祉の観点から、財源の配分等どのように取り組んでいけば良いのかを考えることを目的に、財務省及び財務局が主権者教育の一環として全国で開催しているものです。

経済・財政等の社会問題を他人事ではなく、自ら考えなくてはならない問題だと感じてもらい、その結果、新聞やニュースを見た際に、社会の仕組みや経

済・財政に関心を持つ「きっかけ」としてもらうことや、グループワーク等の話し合いを通じて、受益と負担の両面性（トレード・オフ）をはじめ、多面的な見方が重要であると感じてもらうことを目標に取り組んでいます。

今回のフォーラムにおいて、奈良女子大附属中等教育学校、敦賀高校、富士市立高校の生徒の皆さんのお話を聞かせて頂いて、私たちが望む以上に生徒の皆さんが何かを感じ取り、今も彼らの心の中に刻ま

れているということが分かり大変嬉しく思うとともに、本プログラムに取組んできて本当に良かったと思いました。

そして、このプログラムが、これからの社会が求める人材になるために必要な主権者教育の一つとして、また、この国の舵取りを若い人が担っていく「きっかけ」となり、ひいては、より良い日本の未来の創造に

つながるものとして取り組むことが出来る大きな可能性を秘めたものだと思えました。

私どもとしましては、全国のより多くの教育現場において、この財政教育プログラムが選択してもらえるよう、引き続き頑張っていきたいと思っております。是非、本プログラムと一緒に実践してみたいと思っておられた方々は、遠慮なくお声掛け頂ければと思います。ご連絡をお待ちしております。

中等教育フォーラムの楽屋裏、あるいは 国立大学の附属学校の果たすべき役割について

奈良女子大学附属中等教育学校 鮫島 京一

財政教育プログラム・高校版くん、1歳の誕生日おめでとう。2016年2月19日に奈良女子大学附属中等教育学校（以下、中等。）で産声をあげた君。財務省主計局の海老原さんと加藤さん、そして私の三人が君の産みの親です。君には忘れてはならない育ての親がいます。このプログラムをはじめて受講した中等の高2年生の16名の生徒たちです。かれらによって、また、かれらを支えてくれた近畿財務局の職員さんによって、君は航海に耐えられる船へと磨きあげはじめられました。昨年2月のことでした。

奈良を離れた君は、7月には玉井さんの敦賀高校に、12月には遠藤くんの富士市立高校に寄港しました。両校の生徒たちが君にさらに磨きをかけてくれました。各地の財務局の職員さんがそれを支えてくれました。

君の航海は私に二つの喜びを与えました。一つは海老原さんと私の願いをかなえてくれたことです。私たち二人は君をもっと大きな航海に出したいと考えていました。国立大学の附属学校（以下、附属学校）に広げるだけでなく、もっと多くの学校に広げたいと願っていました。もう一つは私の願いです。君の誕生に立ち合ってくれた人の多くは、福井ラウンドで出会った人たちです。私の願いは、かれらとともに、出会いの段階から次の段階へとすすむことでした。

すなわち、出会いから生まれた信頼に基づいたネットワーク型の協働プロジェクトの展開へとすすむことでした。それは2013年から中等をたゆまなく支援し続けてくれている福井大学の教職大学院にたいしてささやかな返礼を試みることでした。人事の入れ替わりがない中等にできる拠点校としての貢献の仕方を新たに表現する試みでもありました。

2016年11月末、海老原さんから、「もう一度、一緒に何かやれれば」というメールがありました。私も同じ気持ちでした。しかし、同じことをやることに魅力を感じませんでした。君はもう航海に出ているのですから、振り返らず、まっすぐに、もっと遠くを目指してほしかったからです。しかしながら、他方で、やはり君に会いたかった。どのような航海を続けているのか、どのような生徒と出会い、何を感じ学びとったのかを知りたかったのです。

思い切って教職大学院の木村先生に相談しました。君の航海を振り返る場をつくりたいのだが、と。中等の16名の生徒と同じように、君を育ててくれた敦賀高校、富士市立高校の生徒たちに君との出会いについて語ってもらい、君の航海のもつ意味をみんなで考えたい。その場としてふさわしいのは、出港した中等ではなく、君が航海に出るための条件を用意した福井ラウンドではないか、と。かくして君の1歳の

誕生会である中等教育フォーラムが福井大学で開かれたのです。150名をこえる人たちが集まってくれました。教職大学院の3名の院生が裏方として支えてくれました。ありがたいかぎりでした。

さて、私の父は、私が生まれたときに、「親としての役割を与えてくれてありがとう」と私に語ったそうです。父の気持ちが私にはわかる気がします。私はここ10年ほど、附属学校の役割について真剣に問い続けています。まだ一知半解なのですが、君のおかげで大事なことがわかりはじめました。

君は附属学校が果たすべき役割のイメージを教えてくださいました。それは、現代日本や現代世界が直面している課題について、多くの人と手を携えながら、事実に基づいて、ともに理解を深め、解決を模索していく学習指導の方法やプログラムなどを開発し、提供するという役割を果たすことです。いま、「提供する」という言葉を使いました。それは(かつての附属学校がそうしてきたように)「完成品」を提供することでは決してありません。残念ながら、提供できるのは、あくまでも「試作品」なのです。それぞれの学校で、生徒と教師によって、また地域の人たちとともに、さまざまな条件のなかで、創意工夫を凝らしながら、新しい形を創造するように促す「試作品」を提供することなのです。ヨットの言葉でいえば、手にした人によるshakedownを促す、ということになります。ヨットには完成品がありません。shakedownをくり返す(不具合を調整し続ける)ことによって、航海に耐えうる船となるからです。「完成品」ではなく、shakedownを促す「試作品」を提供する。附属学校の

役割も同じで、ここにこそ、存在意義があるのではないかと観じているのです。

附属学校に今、必要なのは、飛び出す勇気だと考えています。君の誕生は、生きた教育実践が創造され、広がっていくのは、「完成品」を示すことによってではなく、航海へと誘うこと——「うちの学校ならばこういうふうにするだろうな」「こういうふうをやったほうがいいだろうな」「ここだったら使えるな」というように——によってであることを教えてくれました。附属学校には、ある種の弱さを自らに抱え込みながら、その弱さを含みこんだ試みを示し、ともに課題に向き合う仲間の関与を誘発し、手を携えて解決を模索していく場を自覚的に創っていく役割があるのではないか。そのような学校になったとき、「汎用性に乏しい附属学校の教育実践」「附属学校だからできる実践」そして「附属学校だから最先端の実践をやるべきだ」というような決まり文句のくびきから解放され、附属学校ならではの新しい役割を果たすことができるのではないか——私が君の誕生から学びとったことです。

そう、航海は続いていきます。新しい寄港地がどこになるのか、どんな航海になるのか。どうかみなさん、このプログラムを、ぜひ、多くの学校で試してみてください。必要なときにはひと声かけてください。喜んでお手伝いします。だからどんどんカスタマイズしていきませんか。そうしなければ、この船はよい船にならないのです。そしてまた、みんなで2歳の誕生日を祝いましょう。そのときを楽しみにしています。

中等教育フォーラム トークセッションに参加して

福井県立敦賀高等学校 教諭 玉井 淳

平成15年の文部科学省初等中等教育局長通知で「出席扱いの要件」について「公的機関に通うことが困難な場合で本人や保護者の希望もあり適切と判断される場合は、民間の相談・指導施設も考慮されてよいこと」と明記されました。また昨年には国会で「義

務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律案」が審議され、ホームエデュケーションが認められようとしています。そんな中、2016年3月9日～15日にかけて行われた人工知能(AI)対人間の囲碁5番勝負で、圧勝が予

想された囲碁のプロ棋士にAIが勝利し、世界中に衝撃を与え、とうとう2017年1月9日にNHKのニュース番組で“登場！AI先生 教育はどう変わる？”が放送されました。番組の中では体験した生徒が「『AIの先生』とどっちが自分を分かってくれるかと言うと、『AIの先生』のほうが早く分かって早く直せる。」と答え、AI教材会社の社長は「一人一人に最適な問題を出したら、本当はもっと上がる。一気に勉強するということに関しては、人工知能が最も優れている。」と語っています。恐ろしい世の中になったものです。学校という場の存在意義は…？さらには私たち教員の存在意義は…？と考えずにはいられません。

元アップル米国本社副社長の前刀禎明氏が2017年1月28日のシンポジウムで次のように語っています。「新しい価値観を創造するには、自分自身を変えて成長させるセルフイノベーションが重要です。大人になっても喜びを常に持つことが人を成長させます。セルフイノベーションのポイントは感じる（感性）、創る（創造力）、動かす（共感力）こと。特に五感で感じて何かを創造することが大切です。」（2017年2月26日付朝日新聞掲載）

ビッグデータの存在が大前提のAI君と共存していくために必要なのは、感じること…。それが各人のセルフイノベーションにつながるのであれば、学校の存在意義は、教員の存在意義はまさにそこにあるのではないかと…。共感するための仲間がいて、感じるための場をファシリテートする教師がいて…。それらを満たす場が学校で…。妄想は膨らんでいきます。

“福井ラウンドテーブル 特別企画フォーラム”の中で『財政教育』について話をさせていただきました。この取り組みはこのフォーラムでも一緒にした奈良女子大附属中等教育学校の鮫島京一先生に紹介させていただきました。最初に話を聞き、「面白い！」と感じました。直感です。その後は財務省の海老原宗貴さん（今回のフォーラムにも参加されました）、當間和幸さん、北陸財務局の浅野一美さんと出会い、敦賀税務署にも協力してもらうことになりました。つながりが直感を生み、さらに人とつながっていく。そして何より、2015年12月の福井大学高大連携ラウンドテーブルに連れて行った時、何もしゃべれなかった生徒達が半年後に堂々とプレゼンしている姿に、鮫島先生はじめ授業を見に来られた多くの先生方が驚かれました。生徒の成長を肌で感じるができる。生徒だけでなく、教員も大きく成長できるチャンスが満載の取り組みです。協働探究学習って、良いよね…、とってしまいます。

今回の福井ラウンドテーブルに参加して、1日目は『財政教育』に取り組んだ生徒の話の聞き、自分自身の実践を振り返りました。2日目のラウンドテーブルでは同じテーブルの方々の話を聞き、共感し、驚き、明るい気分になりました。話し、聞き、感じ、共感し、これらを可能にする人と人とのつながりの場が、ラウンドテーブルです。私にとって楽しく、豊かな学びの場です。今回のフォーラムやラウンドテーブルの開催にご尽力いただいた全ての方々に、この場をお借りして感謝申し上げます。

社会に開かれたイノバティブな中等教育の挑戦

特別企画フォーラムを終えて

富士市教育委員会 富士市立高等学校教育推進担当 遠藤 健

「財政教育プログラムは、どのようなイノベーションをもたらしたのか。」

教科書がないところからのスタートで、3つの新

たな学び方がイノベーションであった。ひとつ目は、「答えのない問いのなかで学校教育と社会教育が協働的に学ぶことができた」こと。本校では、カ

リキュラムマネジメントをしながら長期に渡り財務省の方と市議会委員の方と学びの協働ができた。学校、行政、企業ともやることができ、生徒とそれぞれの団体に多くの気づきを与えてくれた。財政教育プログラムは、場所と人を選ばず、どこの地域でもどの校種でも取り組むことができる教材である。

ふたつ目は、「生徒自ら主体的に学ぶことができた」こと。切り口としては財政だが、社会の仕組みを自分ごととして考えることができる。財政はすべての人の将来に関わることで、自分ごととして捉えやすい。生徒が自分ごととして捉えることで学びは加速していく。財政は、社会の課題・自分の課題・学習の課題の接点にあり、社会の仕組みについて将来に渡り問いを持ち続けることができる。主体的に社会に関わる視点が持てたと言うことだ。またそれは生徒自ら主体的に学ぶ「主権者教育」ができたことを確認することできた。

3つ目は、「必然的に世代を超えて学ぶことができた」こと。個人の考えだけでは限界があり多角的視点と批判的思考が自然と入り込む。「なぜ？どうして？」が生まれやすいためまわりに聞きたくなる。「自分の地域は？都道府県は？日本は？アジア

は？世界は？」と問いを広げ課題の設定が変化していく。課題が変わると関わる人が変わる。生徒の中には、自分のおじいちゃんに話を聞いたり、親戚のお姉さんに話を聞いたり、聞いた内容を財務省の方や市議会議員の方に問いを投げかけたりしている生徒がいた。10年後30年後50年後をリアルに考え、多角的な視点で思考をはたらかすことができていた。

以上3つが新たな学び方であり、学びのイノベーションだと感じた。生徒も教諭も協働先も、ともに未来を考え能動的に学ぶことができた。また、「学び方だけではなく財政の視点・知識は探究的な学びの導入部分で必須である」と感じた。マインドセットの大きなひとつの要素あると言うことだ。では、生徒は何に気づき何を得たのか。生徒の振り返りには、次のような社会で必要とされる力に自ら気づく姿が見て取れた。「現状把握力・批判的思考力・協働的思考力・創造的思考力・状況判断力・知識活用能力・傾聴力・計画修正力・アイデア創出力」、またその背景には「社会のために」という基盤を持つことができていた。それだけではなく、「倫理」という視点も入り、学びを広げていく可能性を十分感じることができた。

私にとって「実践し省察するコミュニティ」とは

富士市立高等学校 総合探究科3年 東端美玖

私は、特別企画フォーラムとポスターセッション、学びde交流タイムに参加し他の学校の活動について知る、また私自身の学校の活動を広める機会となった。

私は半年間かけて財政について学んだ。学びが深くなるにつれて、知りたいことが増え、より良い日本を目指すために、自分自身の意見を多くの人に聞いて欲しいと思うようになった。他の意見を交えて考え、互いのマイナスポイントを補うことができるように、多くの人と関わりを持ち、意見を持ち寄った。活動を通して感じたことは、誰もが納得のいく財政を作り上げることは、簡単ではないということだ。世代ごとに必要な額が違い、負担も異なる。全てを平等にすれば、財政は傾いてしまうとわかった。また、他

の学校での活動報告を聞いても、同じような意見が出ていることがわかった。

学びde交流タイムでは、他の学校の活動を知り、私の経験したことのない活動がほとんどであった。その中でも、他の学校と連携し、スカイプ授業といったパソコンを用いた授業で、遠くの学校の生徒と会話をするという授業に魅力を感じた。その活動が日本だけにとどまることなく、海外との連携を図れば、国際的な学びが可能だと感じた。

しかし、このような以前と違う学び方が、完全に認められているわけではないということも同時に実感した。このような活動をしている学校は少なく、より多くの人に知ってもらうためにも、交流の場やまだ

取り組んでいない学校に対して魅力を発表する機会を増やすべきだと感じた。

今回の経験を通して、学んだことや身につけた力は沢山ある。中でも、現状を把握し解決策を見つけ出すことや、自分のこととして考えることに重要性を

感じた。財政について学んだことで、選挙権を持つ私達が日本の財政に積極的に関わる必要があるとわかった。他の学校と関わりを持つことで、今までの自分を超越、自分自身の考えの幅も広がり、知識も増やすことができた。

Session 0.2 保幼小教育フォーラム

子どもの世界を広げ、つなぐために

大人の世界も広がり、つながる場へ

～保幼小教育フォーラム「子どもの世界を広げ、つなぐために」を実施して～

福井大学教職大学院 准教授 岸野麻衣

企画にあたって ここ数年、福井県幼児教育支援センターの研修にかかわり、保育所・幼稚園・認定こども園といった幼児教育の現場の先生方と一緒に学んできました。同時にここ数年、「保幼小接続」の重要性が理解されてきました。研修では、園での実践やそこでの子どもの学びや育ちを言葉にしていくことに取り組んできました。この言語化し表現していく力こそが、校種を越えて子どもの学びや育ちをつなぐために重要だと考えたからです。

一方で「実践研究福井ラウンドテーブル」は10年以上続けられてきましたが、内容や広報の問題か、これまで幼児教育関係の先生の参加は数えるほどで、参加者の多くは小学校以降の先生方でした。このたくさんの方々に幼児教育のことを知ってほしい、どういうふうに接続するとういのか考えてほしい。そんな思いもあり、校種を越えて幼児期からの子どもの学びや育ちのつながりを語り合う場の一つになればと、このフォーラムを企画しました。

3つの話題提供 幼児教育の現場は、子どもたちが家庭から初めて社会へ出ていき、世界の広がっていく場所です。広がっていく世界が豊かなものとなり、年齢に応じてつながっていくことを求めて、フォ



ーラムの題を「子どもの世界を広げ、つなぐために」としました。

まず、福井県越前市にある社会福祉法人華光会双葉保育園の泰園澄園長から園での取組を報告していただきました。子どもたちが自発的、意欲的にかかわれるような遊びの時間と空間の中で、また栽培や調理などを通じた食育や生活の中で育んできたことを、子どもの姿で捉え、写真を用いた園のお便りなどで発信している取組を語っていただきました。

続いて、滋賀県豊郷町立豊郷幼稚園の沢智子先生からは、研究主任として、先生たちが学び合う園内研究の取組について報告していただきました。各クラスの研究保育をしていく中で参加するすべての先生が主体的に学ぶことができるよう、参観の視点を持つ工夫や、研究保育後の環境構成についてクラスを

越えて考えていく取組を語っていただきました。最後に、福井県福井市西藤島小学校の西片善江先生からは、小学校1年生の担任として、入学までの子どもの学びや育ちを様々な場で活かしてつないでいる取組を報告していただきました。第一声の「幼稚園や保育所の先生方、子どもたちをここまで育ててくださってありがとうございます」という言葉が印象的でした。また生活科でアサガオを育てる実践では、子どもたちが「考える」ことを大事にし、種の撒き方や鉢の置き場も子ども自身がそれぞれ試してやってみる中で様々な気づきがあったことが語られました。

話題提供後には、積極的に数名の方から質問や感想を挙げていただきました。双葉保育園の取組への共感や豊郷幼稚園の実践への関心のほか、西藤島小学校の実践には幼児教育の先生方から「こんなふう

につないでいただけたら！」と喜びの声も挙がりました。

フォーラムを終えて フォーラムを機に幼児教育にかかわる先生のラウンドテーブル参加人数がこれまでになく増え、またフォーラムには小学校以降の先生方も多く参加していただきました。幼児教育で行われている子どもの学びや育ちを育む実践やそれを支える教師が学び合う実践を共有できたこと、小学校でどんなふうに子どもの学びや育ちをつないでいけるのか、具体的にイメージを持つことができたのは大きな収穫だったと思います。子どもの世界が広がりつながっていくときには、それを支える大人にとっても世界が広がりつながるのだと、改めて感じました。ここに集った先生方がそれぞれの実践の場で、フォーラムでの学びをどのように活かし始めたか、実践を交流する場をまた設けたいと思います。

つなげよう、学びと育ちのバトン

福井市西藤島小学校 教諭 西片 善江

今回、保幼小教育フォーラムに参加できたのは、幼児教育センターの観寿子先生のおかげです。4月末に保幼小接続講座(観先生の企画)で松本先生に伺った、生活科「あさがおの実践」であさがおを育てることを通して、子ども達に自分で考えさせたり、失敗から学ばせたりする取り組みに大変感銘を受けました。ぜひ、やってみたいと同じ学年の先生に相談したところ快く承諾してくれたので、子ども達と挑戦してみました。その後、夏の小教研(生活科)で観先生に、私たちの実践を聞いていただいたことから、機会を得て幼稚園や保育園の先生方に1年生の小学校生活のスタートを支えてくださっているお礼を申し上げることができました。観先生、ありがとうございました。

1年生は、小学校の中では、一番年下の子ども達です。迎える上級生や教師は、1年生に対して、「何もできない小さい子」「話が通じない宇宙人」「かわいい赤ちゃんのよう」といったイメージを抱きがちです。私自身も1年生を担任するまでは、そのように思い込んでいました。この2年間、1年生の担任をし、保幼小接続の連携を進めていくうちに、今までの自

分の認識が実際と全く間違っていたことに気がつきました。交流活動や接続会議、聞き取りと、保育園・幼稚園の先生方のお話を伺ったり、子ども達と直接ふれ合ったりすることで、保・幼・小と組織は違っても「一人一人の育ちを丁寧に支えていく」という点でつながっているという一体感を感じました。そして、子ども達の学びと育ちが幼児期と学童期でがらりと別のものに切り替わるのではなく、連続していることが大変よく分かりました。

保幼小フォーラムで、保育園、幼稚園、小学校の取り組みをまとめて見ることができて、「学びや育ちの連続」が一層はっきりと分かりました。そして、1年生を迎える教師や学校は、子ども達一人一人が幼児期の終わりまでに培ってきた資質や能力を十分に発揮できるような学習活動の計画と支援が大切であると強く感じました。しかし、一方で、滑らかでゆったりとした保幼小接続のためには、子ども達が環境の変化に適應する時間を十分にとり、教師が一人一人をじっくりと見取るというゆとりもまた、必要であるとも思いました。私自身の課題として、幼児教育についてもっと知らなければいけないと反省しました。

今後は、フォーラムで学んだことを他の先生方に知ってもらうことから始め、学校全体で「幼児期の育ちを十分に引き出す」支援体制を整えていきたいと思っています。そして、主体的に学び、友だちと関わる中

で学びを深めていく子ども達を育てて、保育園・幼稚園の先生方から託されたバトンを、子ども達の未来に向かってしっかりとつなげたいと思います。

保幼小教育フォーラムに参加して

愛荘町立秦荘幼稚園 矢守 大智 西川 絵理 今居 静香

今回、保幼小教育フォーラムに参加させてもらったことは私たちにとって、とてもいい刺激となりました。私たちが得たものとして、三点のことがあげられます。

一点目は、伝え方の重要性です。ポスターセッションを初めてさせていただきました。多くの方が聞いてくださり、嬉しかったのと同時に伝え方が未熟だと感じました。他の校園の発表を見ていると、丁寧に、聞きやすく話されていました。これは、園で、職員同士で話をする際や、他園との交流を図るときに、活かされるのではないかと思います。

二点目は、互いに学びあう姿勢です。話題提供を受けて、盛んに意見交換されていた様子がとても印象的でした。また、互いの実践に敬意を示しておられ、さらに深まるにはどうすればいいのかを考えておられました。話を聞くだけでなく、それを受けて、どのように自分たちが実践の中で活かしていけるだろうかと考えておられるからこそだと思います。今回、話題提供して下さった、小学校での実践はとても興味深く、小学校だけでなく園でも意識できる視点

がたくさんありました。その実践も、いろいろなところに学びに行かれたことで実践しようと思われたと聞き、自ら学ぶことはとても有意義なことを得られると感じました。互いに学びあうという姿勢が今後私たちも見習っていききたいところだと思いました。

三点目は、教師の熱意や向上心がとても大切であるということです。このフォーラムに参加されていた方は、よりよい教育を目指すために参加されていた方ばかりでした。私たちは、道半ばですが、その中でこれからどのように教育に携わっていくべきなのかを学ばせていただくことができ、意欲にもつながりました。ある園の発表では、自ら学び、園の改革をされている様子を教えていただきました。熱意をもち、現状に満足しないでさらに向上心をもって取り組まれていました。このような姿勢をこれから大切にしていきたいと感じました。

今回学んだことを活かして、職員同士が意欲をもって日々の保育をよりよくする取り組みができるように共有していきたいと思っています。

保幼小連携フォーラムに参加して感じたこと

高浜町保育実践研究グループ ぴっか

初めに岸野先生より、「現在、保幼小連携接続の重要性が理解されつつあり、その本質は子どもの育ちや学びを保育所・幼稚園・認定子ども園から学校へと繋げていくところにある」というお話があり、改めて子どもたちに継続的な育ちや学びの場を保障していくことも教師や保育者の1つの役割であると感じました。

その後、保育園、幼稚園、小学校、それぞれの実践と、教師や保育者が子どもの育ちや学びを支える力をいかにして高めていったかという報告がありました。午後から Zone A にて発表を控えているとい

うこともあり、興味深く報告を聞かせていただきました。

同じ幼児教育に携わる者として、双葉保育園と豊郷幼稚園の報告には共感できる部分が非常に多かったです。“子どもの主体性あるたくましい育ち”をどちらの園でも大切にされており、環境の再構築という言葉のもと職員全員で保育を試行錯誤されている様子に、子どもの主体性を引き出すためには、第一に保育者の主体性が問われるのだと痛感しました。また、その主体性が保幼小連携接続においても活かされていくのだと思います。

そして、小学校の教師という視点からの福井市西藤島小学校の報告には、「ここまで幼児期の育ちを大切に、伸ばしていただけるのか」と率直に嬉しく思いました。就学を見据え“学校で通用する子ども”になるよう表面ばかりを気にしがちですが、本当に大切なことは“学校で学ぶ力のある子ども”に育てることだと感じます。幼児期のほんの些細な経験が小学校での学習に結び付き、子どもたちの生きていく力に繋がっていくのだと思いました。

それぞれ3つが異なる視点からの報告でしたが、共通する部分が各所にあり、それをこのような機会をもって学びあうことで子どもたちの育ちを支える環境を設定できるという手応えを感じ、改めて保幼小連携の重要性について確認できました。

しかし、実際のところは今回フォーラムに参加するまで、保幼小連携接続が重要であることを感じながら、「学校の先生方に自分たちの実践はどのように映るのだろう…」と不安に思う部分があり、どこか一步踏み込めないところがあったように思います。ですが、今回、実践や思いを聞き、伝え合うこ

とで学校の先生方から「よい実践をされているんですね。」「大事に育てられた子どもさんを学校でも責任を持ってお預かりします。」というような温かい言葉をたくさんいただき、自信に繋がったと同時に、躊躇う必要はどこにもなかったことに気づかされました。ラウンドテーブルなどの場に、まだまだ幼児教育という立場からの参加が少ない現状があるのは、私たちと同じようにどこか一步踏み込めず迷っている部分が少なからずあるからなのではないかと推測します。今回を一つのきっかけとして、今後も保幼小連携接続に前向きに取り組むと共に、幼児教育の立場からの参加が増え、子どもたちの学びや育ちについて語り合えるコミュニティが広がることを願っています。

子どもの育ちを支える環境を作るために、現在、高浜町立保育所は保育所内で職員間の連携を見直す段階にあります。今後は他の園にも視野を広げ、密な連携がとれた上で小学校をはじめとする他の機関とも繋がりをもち、互いに支え合える保幼小連携接続の形を築いていきたいです。

Students' Poster Session

子どもたちが語る『私たちの学校・学び・未来』

Students' Poster Session・学び de 交流タイムを通しての成長

福井県立羽水高等学校 教諭 川崎 直樹 教諭 永田 卓裕

本校では今年度から、「福井市役所に提案！」というテーマの下、福井市の抱える課題に対する解決策を提案することを目指して、福井市役所などと連携して探求学習を進めてきた。今回発表した生徒たちは、「その時に備える」というクラステーマの下、「災害時に正しく情報を伝えるにはどうしたらよいか」という課題の解決策を模索し、福井市役所による出前講座、市役所を訪問しての担当者との意見交換、福井気象台の出前講座、宮城県の高賀城高校生とのスカイプによる意見交換会など、生徒たちは学校外部の方々から様々な助言をいただきながら思考を深めてきた。

今回の発表は、自分たちの学習の成果を発表するだけでなく、本校の取り組みを校外に発信する初め



ての機会であり、学校・生徒両者にとって大変貴重な学びの場であった。以下は、参加した生徒によるふり返りである。

○ポスターセッションを通して

<練習の成果>

事前準備の段階では、原稿を覚えることに必死だった。しかし、練習を見てもらった先生から「大切な

のは、原稿通り読みあげるのではなく、その場の状況に応じて正しく・わかりやすく伝えること」とアドバイスをいただいた。それ以降、練習の仕方が変わった。本番で大人の方々から質問された時はとても緊張したが、その場でしっかりと考え、自分たちの思いを伝えることができた。練習の成果を出すことができたと思う。

<発表を通して学んだこと>

私は、今回の発表で2つのことを学びました。1つ目は、自分が担当した部分以外も詳しく把握しなくてはならないということです。今回、私は突っ込んだ質問をされた際に答えることができず、班のメンバーに迷惑をかけてしまいました。2つ目は、発表の準備をしっかりすることです。他校の人たちは原稿を見ず、ジェスチャーを交えて話せていたし、中には小道具を使ったり、または音楽を取り入れている人までいました。今回の経験を生かして、今後、自分たちの発表と学習をより良いものにしていきたいです。

○学び de 交流タイムを通じて

<自分に足りないもの>

県内外の高校生とのディスカッションを通して、私には語彙力が足りないと感じました。「イノベーション」という言葉を聞いても何も思いつかなかったし、言いたいことは決まっているのに、それに合う言葉を組み合わせる話すことができませんでした。これからは様々な場面で「言葉」というものを意識していきたいと思います。

<自由な発想>

今回学んだことは、一人一人が持っている自由な意見を出し合って組み合わせるとで、また違った新たなアイデアが生まれるということだ。話し合いで自分の考えがとてつ広がり実感できたので、他の場面でもこうした活動をもっとしてみたいと感じた。

生徒それぞれの感想から、彼らが今回の活動を通して、次の学習段階に進むための大きなヒントを得たことが読み取れる。今後も他者から学ぶ姿勢を大切に、それぞれの目標に向かって学習を続けてもらいたいと考えている。

語ることを通して成長する至民中生

福井市至民中学校 教諭 宇原 弘晃

昨年度に引き続き、至民中央委員会（生徒会）として、ポスターセッションに参加させていただいた。今回はクラスター長2名（2年）、副クラスター長2名（1年）をポスターセッションに参加させていただいた。

生徒たちに至民中の何を語りたいのかを尋ねると、①中央委員会の取組、②異学年型クラスター制、③地域交流、の3つの柱で語りたいと答えた。昨年の発表では至民中学校の建物や仕組みを中心に語ったので、今回は異学年型クラスター制の魅力を中心に、学校の魅力や他にない取組を紹介することになった。

中央委員会の生徒たちは、生徒総会や3年生を送る会の準備に追われている。したがって、ランチ会

を開き、給食の時間と昼休みの時間を活用し、ポスター作成と発表練習を行ってきた。準備を始めた当初は、①～③の項目について、具体的に何をどう語れば良いのかわからない様子であった。しかし、至民中学校開校の経緯を伝えると、自分たちの取組が今まで以上に進化していることに気づき、語りたい気持ちが沸いたようであった。そこからは、ポスター作成もスムーズに進み、発表練習ではお互いに内容を突っ込みながら、理解を深めていた。

当日は安居中学校・附属中学校・美山中学校を始め、県内外の小学校・中学校・高校が発表を行った。生徒たちは、他の学校の生徒たちが熱く実践を語る姿を見て、エネルギーをもらったようで、発表の順番が回ってくると、練習以上に熱く、緊張感を持つ

て語る事ができた。発表後、参観者から取組について想定外の質問もあったが、質問に対して彼らは、自身の経験を交えながら落ち着いて答えていた。誠実に語る姿は、まさしく至民中学校が求める『自分の言葉で語る』生徒に他ならなかった。

その後の「夢語ろう会」では、他校の生徒たちと未来の学校について語り合い、互いに直面している課題について、解決の糸口を見つけたようであった。

ポスターセッションの場を経験することで、生徒たちは至民中学校について再度理解を深め、彼らの行っている実践に自信を持つ事ができた。彼らが語れる生徒に成長できたことで、他の生徒たちにも良い手本となりそうである。今後、他校の実践も取り入れながら、生徒活動の充実を図るとともに、胸を張って学校を語れる生徒を育てていきたい。

長期的実践を省察できた SPS

福井市美山中学校 教諭 佐々木 庸介

本校は市街地から 15km ほど離れた杉の林に囲まれた中学校です。小規模校で、就学前から顔見知りの生徒たちは中学校卒業までほぼ決まった集団の中で生活をしています。他校と学校文化を紹介しあい、実践を共有する中で省察し、今後の実践に生かしてほしいという思いから昨年度に引き続き SPS に参加させていただきました。

今回は2年生の3名が SPS へ参加しました。2年生は総合的な学習の時間に3年間を通して「新幹線福井駅開業時の主権者として福井の未来を考える」というテーマのもと学習を行ってきています。私は、「生徒が自分たちの学びを語るのであれば、自信をもって考えてきた過程を紹介できるこのテーマでいこう」と考えポスターを作りました。すると生徒から「美山中の理科の授業を発表しましょう。班で疑問を解決していくような授業で面白いので。」と提案され、急遽追加でポスターを作りました。

SPS が始まると、まず生徒は越廼小の発表を見に行きました。生徒は「僕たちがやっていることに似ている。小学生なのに地域を盛り上げようとしているところがすごい。」と驚いていました。また、「自分たちでゆるキャラを作って握手をしてもらっただけでもかなり福井を知ってもらうために効果がありそうだ。僕たちもやってみよう。」と感心していました。

さらに、県内外の高校生が語りかけるように発表する姿、その場で質問を受け思ったことを語る様子などを見て「あんな風に発表してみたい。」「僕たちでもわかりやすく発表してくれている。」というつぶやきもありました。自分たちの発表の前に他校の熱く語る姿を見て、自分たちの発表に対しての意欲が高まったように見えました。



他校の発表を聞く前の生徒はポスターの上から順番に話していこうと考えていたようでしたが、発表直前にどうしたら人を引き付けることができるか考えて「初めに（ポスターの下の部分にある）アンケートの結果から伝えて、えっと思わせてからなぜそうなるかを説明しよう。」「どう思いますか？とか見ている人に聞いてみたらどうだろうか。」と意見を交わし、発表を始めました。発表では自信満々に自分たちの学びを語る姿が見られました。

発表後に行われた夢語ろう会では、具体的に普段の授業や活動の様子を共有しました。私が入ったグループでは「決めごとの難しさ」についての話題が盛り上がりました。「何かを決めているときに意見が割れ、否定的な意見が次々が出る場合、実行委員としてどうすべきか」という福大附属中の生徒の話題提供をきっかけに、自分の学校ならどうするかなど具体的な話が展開していきました。本校の生徒は「美山中ではすんなり決まってしまうことが多い」と

い。」「そもそも全会一致にする必要は？」など異なる文化に驚いていたようでした。

他のグループで話し合いをしていた本校の生徒は、「理科以外の授業もグループ活動で行い、みんなで話し合いながら学んでいくスタイルがすごいと思いました。それならグループで取り組むテストというものもあっていいんじゃないかなと思います。」「僕はグループ活動がとても楽しく勉強になると思っていたけど、ほかの学校の人も同じように思っていました。僕と同じように思っている人がいたことがすごいと思いました。とても面白かったです。」「テレビやネットを使った授業・宿題があるといいという話になったのですが、僕もそう思いました。」など興奮した様子でした。

本校では自分たちの実践を異質な他者に伝えるという機会をあまり作ることができません。H28年度の文化祭では地域の方々と後輩へ学習過程を伝え、将来の美山地区に関する討論会を開きました。しかしこれは美山を知っている人への発表なので、生徒も詳細な説明をしませんでした。今回のSPSでは、美山を知らない人に伝える必要が出てきたことで、根底となるような部分から説明する必要が出てきました。四苦八苦しながらも生徒は実践を振り返り、発表を考えることができました。

SPSの発表を通して、普段授業で行っているような数時間毎の振り返りではなく、長期の学習過程を俯瞰し、意味づけていく活動によって自分たちの学びの意味を深く理解できたのではないかと思います。そして、夢語ろう会では、文化や背景が異なる学校でも似た価値観を持って実践が展開されていることに気づき、多様な文脈においても共通点が見出されることを嬉しく思ったようでした。また、反対に自分たちの学校には無く、取り入れたいと思う部分も多くあったようでした。

私も生徒がどこに意味を感じて普段の授業に臨んでいるのか理解できました。グループ活動を有意義に思っていること、課題を解決していくことを楽しむのが授業の醍醐味であると感じていること、ほかの学校がしていない自分たちだけの学びを伝え「驚かせたい」など学びに誇りを持っていることなど、生徒が探究しつづける授業をさらに良いものにするためのヒントがもたらされたように感じます。

SPSを通して、教師も生徒も長期的実践を省察し学び合えました。今後さらに実践を進め、再び報告できればと思います。

福井大学ラウンドテーブルに参加して

福井市六条小学校 5年1組 谷本 咲良

わたしは、福井大学の13階の会議室で総合の発表ができてうれしかったです。12月に六条小学校で行われた収穫祭で、地区の方達や全校に発表したけれど、それとはちがった緊張がありました。他の小学校に向けて発表するので、収穫祭の言葉を手直しし、六条の米作りやお酒造り、新生姜についてみんなで担当を決め直して発表しました。私が選んだところは、新生姜の葉っぱを観察したことや、新生姜の甘い蜜でホットケーキを作ったことについてです。私の中では大成功でした。越廼小学校の六年生がたくさん感想を言ってくれたので、「私も、この後、しっかり越廼小学校の発表もきこう！」と思いました。越廼小学校のお友達は、六条の新生姜やお米についての活動と、自分たちの越廼のへしこについての活動とを比べながら聞いてくれたのがよくわ

かりました。レシピ作りや地区の方達とのかかわりなど、共通点もありました。同じ産業でも、それぞれの地区のさかんな産業が農業と漁業ということで、そのことについても発言してくれました。スクリーンを使っただけの発表は六条だけで、他の学校は模造紙に書いてありました。越廼小学校は地区の祭りで踊ったへしこの踊りを踊ったり、チラシを配ったり、へしこのキャラクターが登場したりと、いろいろ工夫があったのでまねしてみたいです。

午前中の発表が終わってから、越廼小学校の子とお弁当を食べたり話し合ったりして、仲良くできたので、「福井大学に来てよかったな。」と思いました。越廼小学校の行事や習い事など、発表とは関係ないこともたくさん話し、とても楽しめました。交流タイムでは、「越廼のへしこと六条のお酒をセッ

トで売り出したい。」「六条の美味しいお米とへしこで、へしこ茶漬けを食べてみたい。」「越廼のへしこ六条の新生姜のキャラクターを作り、キーホルダーにして売り出したい。」など、お互いの総合の取組が、もっと広がる努力をしようということになりました。



今回の活動を通して、他の学校のとりくみを聞くだけでなく、仲良くなったり、自分たちの総合の活動について意見がもらえたり、とても楽しい時間を過ごすことができました。



Zone A 学校

子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

— 支え合うコミュニティに向けて —

福井大学教職大学院 准教授 荒木 良子

Zone A はこれまで「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」をテーマに、協働のあり方について論議を積み重ねて、その重要性を様々な角度から確認してきた。昨年は「校種を超えた教育を協働する」をサブテーマに、子どもの成長・発達という縦軸を共有する協働の在り方を検討した。これまでのセッションから協働によるチームとしての取り組みの重要性は十分すぎるほどわかっている。しかし、具体的にどうすればいいのかという場所で立ち止まらざるを得ない現実があることも多くの現場から聞こえてくる。わたしたちは今一度、教職員一人一人が同僚をはじめとする他者といかに支え合うか、その具体的な在り方について検討し、希望と現実的な可能性を探そうと考えた。



Session I のポスターセッションでは、保育園、特別支援学校、小学校、公民館など多彩な現場から、同僚を支える報告いただいた。ラウンドテーブル初参加の方は「広場」の意味をかみしめるように、人が人に出会う場所、実践に出会う場所であると言われていた。

Session IIのシンポジウムでは、シンポジストとして高浜町保育研究グループぴっか、坂井市立春江小学校の山田俊行教諭、福井県立ろう学校の小八木隆校長から、支え合う取り組みについて、時間を忘れるほどに充実した報告をいただいた。

ぴっかは発足して2年目の保育研究グループである。少子化等の影響から若手が育ちにくくなりつつある保育所の環境を、保育所が協働する力に変えて、4ヶ園での支え合い、学び合う仕組み作りと具体的な実践の報告があった。「子どもの主体性」をキーワードに「子どもたちが自分から学ぼう、遊ぼうとする力を育てる」を大切に実践しようと掲げたが、具体的にはどういうことなのか。一人一人の捉え方は様々である。保育を公開し合い、若手の疑問や悩みを共有することで、保育の本質がより確かなものになっていく。そこにはベテランや中堅が指導し、若手が指導されるという構図が全く感じられないのは、子どもの姿を具体的に共有し、課題を具体的に共有し、共に考えていく過程があるからだろう。保育所からの報告は新鮮で、会場の聴き手のみなさんが温かな表情であったことが印象的だった。

山田先生は確信犯である。3年目になる若手教員研修会の取組の分厚いレポート持って参加されて、報告時間の延長を最初から宣言された。1秒も飽きさせない話しぶりは、充実した内容に裏付けられているからこそである。報告の中に紹介される先生方が会場のあちこちに居て、手を上げる…会場そのものが山田コミュニティになっていくような感覚を覚えた。若者との座談会(フリートーク)に手応えを得て、なんと秘密裏に開始された研修会は次第に公認のものになり、定期的な開催に至った。実施内容は具体的なテーマを掲げてのグループセッション、模擬授業など工夫されたものであり、若手が自由に物が言える場、時間、雰囲気大切にされていることが感じられた。山田先生のキーワードは「対話」なのだ。

小八木先生は延長した時間を自分の報告で調整しますと言われたが、やはり規定の時間では終わるこ

とはなかった。ご報告内はご自身が以前、勤務されていた特別支援学校で中学部主任として、学び合い、育ち合う組織を作って行かれた約5年間に渉る取組の概要である。仕組み作り(学級担当の在り方を変えて、一緒に考えたり話し合ったりする仕組みを作る)、仕掛け作り(研究助成や学会発表を利用し、目標を持ち、実践を整理し、振り返る機会を持つ)、人作り(複数の学級を束ねる経験を積み、グループリーダーを育てる)、評価作り(外部評価、他校や校内の他学部からの評価を得て自信を育む)とまとめられた内容は、特別支援学校だけのことではなく、協働が起きるときに必要なことが押さえられていた。

報告の実践の舞台が、保育所、小学校、特別支援学校中学部と異なったことで、どこにも共通する支え合う姿がより具体的に浮かび上がった。さらに2年目、3年目の取組であることから、初めの一步が印象的に語られている。最後に小八木先生が、若手研を秘密裏に始めたと言うことは、校内に阻むものはあったのかという主旨の質問を山田先生にされたが、それは、フロアの聴き手を励ます言葉であったのだろうと考えた。何かしら始めようとするときに、出会うハードルはあるだろうが、進む方法はある、さあ、立ち止まらずに進んでいこう、と。

Session IIIでは、5人程度のグループに参会者が分かれ、Session I・IIの熱気が冷めやらぬ中で、それぞれの思いや、各学校・園の取り組み、そして今後の課題について時間いっぱい語り合った。Session I・II・IIIと進み、互いの実践に耳を傾け、議論と共有を展開していく中で、他者の課題を自分の課題とし、校種や経験が異なる者同士の実践から本質的なことを見つけ出して共有する語り合いが繰り返されていた。自分の小さな悩みも深い苦しきも大きな喜びも他者と共有され、共有財産となって、わたしたちは育ち合う。そういうコミュニティの形成を目指したいと思いを新たに作るセッションとなった。

ラウンドということ

福井東特別支援学校 教諭 見谷 文子

大学に到着したのはちょうどお昼のポスターセッションが終わろうとしていたときでした。熱っぽい雰囲気がまだ漂っていて、多くの人たちが語り合っていました。「あー、みんなが学びあってる場だ！」と感じながら自分の参加する Zone A の場所へ急ぐ。

久しぶりのラウンドテーブル。今回はシンポジウムをお聞きし、その後のフォーラムでグループで話し合うという形の参加となりました。「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」。日頃、特別支援学校という、もしかしたらとても狭い場所の中であるのに、価値観や目標の些細な違いが決定的な違いのように感じて、いつの間にか動けなくなっていた自分を感じていました。「ラウンドに行ってみよう」と思いました。

シンポジウムでは保育所、小学校、特別支援学校と全く違った場面でのそれぞれの取り組みはお聞きしているだけで、少し胸のすく思いがしました。

若い人たちが悩みを共有し自分の思いを遠慮せずに語り合える場、そうした思いを学校内に生かしていけるための組織をどう作りどう継続していくのか、違った場所での取り組みであったけれど、根底に「他者との語り合いの中での支えあい」がありました。共通の思いの確認と同時に他者の視点を取り入れること。できるように自分の現場では簡単ではない。

フォーラムでは保育所、中学校、高等学校、特別支援学校の職員がテーブルを囲み、語り合いました。情報を共有してもそれを日々の指導に生かして切っていない、その子どもに何ができるか、話し合える場にするためには何が必要かなど、立場も年代も違う者同士が語りあい聞きあうことが自然な形ででき、改めてラウンドであることの大切さを確認しました。

組織や人が成長していくためにラウンドは欠かせない。参加して深呼吸できました。

ありがとうございました。

Zone A 学校 sessionIII フォーラム 参加報告

札幌大通高校 教諭 富田 晃平

フォーラムで一緒にテーブルを囲んだ福井大学教職大学院の荒木先生から、参加しての感想を書いてもらえないかというお話をいただいて、ちょっと戸惑ったのですが、一緒にお話をした先生方そしてこの場をつくって下さった皆さんへのお礼の意味を込めて報告させていただきます。

Zone A は、教師のコミュニティ、支え合い、学びあいをテーマに三つの実践レポートがあり、その後、小グループに分かれての意見交換を行いました。私のグループは現在大学院生でもある中学校の先生（兄貴的なバリバリの中堅）、保育士3年目の先生（悩みながらも明るく前向きな若手）、4月から教員になる大学生の方（希望と不安を胸に抱く次世代の担い手）、そして私（ややくたびれたおじさん高校教

員）さらに途中から教職大学院荒木先生（池上さんのような鋭い指摘をビシビシ）と、多様な構成でした。（注：カッコ内は私の受けたイメージです。ご了承下さい。）こういった顔ぶれで話ができること自体、貴重な経験であり、また異なる立場ながらそれぞれに子どもに向かう思いを共有し、非常に嬉しいひとときでした。

session II では教師が学べる場を組織的につくるという観点で具体例が示されましたが、我々の話し合いの中では、組織化と共に普段のちょっとした会話、相談といったことが大きな役割を果たしていることも指摘されました。おそらく、組織的な取り組みと日常のコミュニケーションは教師のコミュニティを支える両輪であり、双方が補完的な役割を果たすも

のだと思います。若手の先生からは、「わかってないなど思われるのが嫌で聞けないことがある」、中堅の先生からは「もっとよいアドバイスができないかともどかしく思うことがある」とそれぞれの本音も交わされ、そういった意識もみんなで共有していくことがよりよい教師コミュニティづくりにつながると感じました。

今、学校で普段の仕事に戻り、再び目の前の課題にあたふたと対処する日々ですが、ふとラウンドテーブルのことを思い出すと、一生懸命な先生方の様子が浮かび、励まされます。私も全国各地で奮闘する「チーム教師」の一員として頑張っていきたいと思っています。

Zone B 教師教育

21 世紀の教師教育をイノベーションする:

B0 福井型教育の日本から世界への展開

福井大学教職大学院 教授 倉見 昇一

国を支える人づくりの基盤である我が国の教育制度に対し、新興国をはじめ諸外国からの関心が高まっています。そのような中、アフリカに対する教育支援の必要性は、昨年8月にケニア・ナイロビで開催されたアフリカ開発会議(TICADVI)でも確認されている重要な課題です。アフリカに対するこれまでの教育支援の多くが、日本の公教育スキルを伝達する方法が中心でありましたが、アフリカでは、授業研究を中心とする教師の研修システムの確立に向けて、日本の継続的な支援を期待する声があります。

そこで、今回のラウンドテーブル Zone B 0 は、日本の学校を支える教育システムの中でも特に優れた成果を示している「福井型」の教育システムを、アフリカを皮切りに世界に発信することにより、21 世紀の学校づくりと教師の学びのための専門職学習コミュニティ・ネットワークを世界に創設することをテーマとし、そのためのスタートアップ事業として位置付けました。

福井大学教職大学院では、昨年11月に、福井県教育委員会や JICA と連携協力し、エチオピア、マラウイ、ナイジェリア、ウガンダの4ヵ国から、それぞれの国で教育行政官として教員研修や教員養成研修に携わっている7名を約3週間受け入れ、学校を拠点として教師同士が学び合う環境や組織づくり、その

過程での省察の重要性など、「授業研究」による教育の質的向上についての研修を行いました。Zone B 0 のプログラムは、その研修員の中でエチオピア、マラウイ、ウガンダから4名の方を招聘し、福井で学んだことや現地で実践していることを中心としたプレゼンテーションからスタートしました。

プレゼンテーションでは、教師あるいは生徒同士が学び合うコミュニティづくりや教師同士で授業を観察しその後に reflection session を行う授業研究のプロセスとデザインのほか、授業改善のために学習者(生徒)の姿や声を反映する必要があること、実践一省察(reflection)を往還するサイクルが継続的な教師の専門的力量形成に資すること、アフリカにおいても探究型への学習の転換が必要であることなど、福井で得た知見や体験した方法を自国の状況や現状に合うようにアレンジし、実践しつつあることなどが報告されました。

続いて行われたフォーラムでは、伊藤忠商事の小林栄三会長から、アフリカ「アジェンダ 2063」や TICADVI についての説明の後、アフリカは 21 世紀後半に向け大躍進が期待されること、一方で水や食料など人口急増への対処、紛争や病気などの不安があること、そのような中で、学校教育や社会人・企業人の教育を担う人材の発掘・育成など教育システムの

刷新・増強が必要不可欠であることなどのお話がありました。JICA の鈴木規子理事からは、アフリカで小学校を卒業できる子供は約 2 人に 1 人、中学校を卒業できる子供は約 3 割、基礎的な学力(小学校 4 年生レベル)を身に付けていない子供は約 6 割(およそ 9000 万人)というアフリカ教育の現状とともに、ザンビアの授業研究やエチオピアの学力評価、ミャンマーのカリキュラムや教科書改訂についての事例が紹介されました。福井県教育庁の淵本幸嗣企画幹からは、福井県では小学校からの英語教育など外国語教育を推進しているが、グローバルな社会で活躍していくためには、福井の子どもたちが郷土の歴史、自然や伝統、産業などを学び、ふるさと福井を理解することとセットで考える必要があること、全国的には福井県の高い学力や体力が注目されているが、むしろ芸術・文化教育などの情操教育に多くの予算をかけていることなど、福井県の教育方針についてのお話がありました。福井大学教職大学院の柳澤昌一専攻長からは、研修カリキュラム構成に関わって、省察的授業研究へのアプローチ、その長期的展開の跡づけ(省察的実践記録の検討)、長期的展開を支える専門職学習コミュニティを培っていく視点と編成など



教職大学院のカリキュラム・デザインについての説明がありました。

Zone B 0 には、県内外から学校や大学関係者だけでなく、出版社や IT 関係企業の方々の他、フィリピン、インドネシア、オーストラリア、アメリカ、コロンビア、リトアニアなどから 25 名ほどの参加者もあり、フォーラムに引き続いて行われたセッションでは、参加者がグループに分かれ、アフリカからのプレゼンテーションやその後のフォーラムを踏まえて、その感想や意見、自身の取組などについての議論が活発に交わされました。

「省察的協働探求との出会い」

共同コンピュータ 会長 兼 グローバル福井 代表取締役 吉村 一男

2017 年 2 月、初めてラウンドテーブルに参加させていただき、省察的協働探求と出会いました。福井大学附属中学の第 9 期卒業生ながら、最近まで「福井型教育」について知りませんでした。私はシンガポール在住 20 年を超え、その前のニューヨーク、香港と合わせると人生の半分を、また 18 歳で福井を離れてからの 3 分の 2 を海外で暮らしています。世界に冠たる教育先進国 シンガポールの教育省が、現役教師 20 人以上を福井に視察に送ったと知ったのは一昨年です。それから附属中学の 2 年先輩 三田村彰先生との再会をきっかけに、ラウンドテーブル参加の機会を得ました。

省察的協働探求、英語では **Reflectional Co-Inquiry** でしょうか。従来型教育が教師から生徒への知識移転を中心としたことに対し、21 世紀型グローバル教育が、生徒の自主的な知識吸収と理解を深めるための発信と学ぶ者同士の繋がりが中心で、教師はファシリテーターであるべきことを鑑みると、正に省察

的協働探求はその中核にあると思います。また、それは福井型教育の中心概念であるようにも感じます。

省察的協働探求は学校現場だけではなく、会社、役所、ボランティアなどあらゆる組織で普遍性を持つと考えられます。株主利益を最優先する資本主義が手詰まりになる中、会社はその構成員(社員と家族、関係先、顧客、地域、投資家)が幸福を追求する教育現場でもあることを、経営者の端くれとして肝に銘じたいと思います。また、グローバリズムの負の側面が浮かび上がる一方で、正の循環を取り戻す方法の一つが省察的協働探求にあると考えます。

シンガポール人の妻との間に二重国籍の男女二人の子を持つ父としても、故郷 福井とアジアのハブシンガポールを直接繋ぐことをライフワークと考えています。シンガポールは直近の PISA で読解力、数学、科学的リテラシー 3 部門の頂点に立つなど、高い教育力には定評がある一方、その徹底した能力主義には危うさもあり、また最速であった日本の倍のス

ピードでこれから進行する高齢化社会を前に、人生100年時代の生涯教育モデルを模索しています。福井型教育とシンガポール型教育が、省察的協働探求を通じて、生涯教育を含む21世紀型グローバル教育の

ベストモデル構築に繋がることを夢見て、いや、お役に立つことを目指して、次回ラウンドテーブルにも是非参加したいと考えています。

「ワクワク!」「ドキドキ!」実践研究 福井ラウンドテーブル

福井市 つぼみ幼稚園 副園長 松原 茂

「ワクワク!」「ドキドキ!」これらの言葉は、子どもの湧き上がる感情を表現する擬態語（オノマトペ）として、よく用いられる。幼い子どもは、日常生活のなかで未知の事柄に出会う多様な直接体験を重ねつつ、考え行動しながら経験を積み、成長していく。

今回、私は「Zone B 教師 [B0 福井型教育の日本から世界への展開]」に参加した。

アフリカの国々の先生方からの実践発表では、「教育を通して国の発展を目指す意欲とその成果」を目の当たりに感じた。続いて、JICA 理事・商社会長・福井県教育庁・福井大学教職大学院の先生方の話し（フォーラム他）を伺った。その後セッションが行われ、グループの先生方から、大切にされている考えをお教えいただいた。

「幼児教育に関わる私自身が、これからどのようなことを実践できるか。」を思いながら、メンバーの先生方から話題をお聴きし、皆様お一人おひとりが歩んでこられた過程の話しに心を揺り動かされた。

世界各地では、2015年6月開催の福井ラウンドテーブルで発表があった、「レッジョ・エミリア・アプローチ」を一例として挙げるができるように、風土や歴史の変遷あるいは社会からの働きかけ

により、特色ある幼児教育が展開され、それらの研究・検証が行われている。

日本では近年、「非認知的能力」に着目した、幼児期から小学校低学年ごろにおける教育の大切さへの理解が浸透してきている。

また、日本において福井の教育は、「先発した取り組みが数多くなされている。」と評価をいただいている。

世界では、日本（福井）の幼小間・小中間・中高間の接続連携、および幼小一貫・小中一貫・中高一貫の教育システムや内容を、後年どのように受けとめるのだろうか？

互いに異なる文化を認め合うことからスタートした福井型教育の世界発信を今後も繋げ、各国の人たちと学び合い・競い合いながら、より深く交流することで、「ワクワク!」「ドキドキ!」したい。

幼児期においては、身近な年長者や友だちへの憧れが行動を起こす動機となる。そして、集団のなかで想いを共有しながら達成感を味わう喜びは、向上心を満たす。

毎回新たな出会いを見つけることができる実践研究 福井ラウンドテーブルは、子どものころと変わらぬ「ワクワク!」「ドキドキ!」がいっぱいだ。

ありがとうございました。

ラウンドテーブルの国際ゾーン

International Zone: A Brief Description of Activities from the February 2017 Round Table Event

福井大学教職大学院 講師 ハートマン エリザベス 杉野



ラウンドテーブルの国際ゾーンの概要である。別途発行する国際ニューズレターにもっとくわしく説明する。

The University of Fukui was pleased to have held the first international zone at this year's Round Table. Activities were held at Fuzoku Elementary and Junior High Schools and the University of Fukui on February 17-19, 2017. Participants included 53 teachers, administrators, and educators from eleven countries including Australia, Bhutan, Cambodia, Columbia, Ethiopia, Indonesia, Malawi, the Philippines, Uganda, United States of America, and, of course, Japan.

On Friday, participants learned about the University of Fukui's attached schools, Fuzoku Junior High School and Fuzoku Elementary School. A presentation by Pauline Mangulabnan described the schools' philosophy, background, and approach to professional development. Participants were eager to connect these ideas to their own contexts during small group discussions. In addition, participants attended two classroom observations: a mathematics, English, or science class at the junior high school and an elementary mathematics class. Mr. Kinoshita (junior high science), Ms. Yanagi (junior high music), Mr. Makita (junior high vice principal), and Ms. Watanabe (elementary mathematics) were able to debrief about the lessons and the inquiry-based teaching style at Fuzoku.

On Saturday, the international participants attended the Round Table Symposium events. The morning began with a presentation and small group discussions about the Department of Professional Development of Teachers at the University of Fukui. In the afternoon, the four educators from Africa presented about their efforts around engaging in Lesson Study since participating in the November 2016 JICA – University of Fukui Knowledge Co-Creation Program. After these presentations, participants joined Zone D to learn about Lesson Study efforts in Japan. The day concluded with small group discussions about the Symposium events.

On the final day, participants shared their practice reports in small groups. Each group included educators from Japan as well as a mix of other countries. The reports covered a wide range of topics including project-based learning, special education programs, challenges faced by administrators, and classroom case studies. Participants commented that while their contexts and roles were very different, there was commonality in the challenges of creating productive learning environments and meaningful educational experiences. International participants commented that they learned a lot from their international colleagues and from the experiences in Fukui.

Personal Reflection: I believe that the feedback and comments from participants reflect the success of this first international zone. This event was a valuable springboard for future events and collaboration. Beginning the event with a school visit to Fuzoku was extremely valuable. Because of this school visit, participants were constantly talking and thinking about students and their experiences in classrooms. As a co-facilitator of the international zone, I feel that managing the event was challenging but it was a worthwhile event for all participants. I would like to express my gratitude for the teachers at Fuzoku for opening up their classrooms, the participants who travelled long distances to come to Fukui,

and the teacher trainees and my colleagues who helped plan this event. In particular, thank you to Pauline Mangulabnan. Without her, this event would not have been possible. I am sincerely looking forward to future International Round Tables.



参加者からのフィードバックやコメントは、この最初の国際ゾーンの成功を反映していると思う。こ

のイベントは、今後のコラボレーションのための良い出発点である。附属中小学校訪問でこのイベントを開始できて、とてもよかったと思う。その学校訪問があったからこそ、参加者は常に生徒について話し、考えていた。国際ゾーンの共同ファシリテーターとして、複雑なイベントを行うことは難しかったが、価値のあるイベントだったと思う。授業を見せてくれた先生方、遠いところから福井に来てくれた参加者、ラウンドテーブルの企画を手伝ってくれた教員研修留学生や同僚に、心から感謝したい。特に、Pauline Mangulabnan に感謝する。彼女のおかげで国際ゾーンが行えた。次の国際ラウンドテーブルを楽しみにしている。

B1 管理職養成の今日的な意義を考える

—教職大学院の可能性と課題—

福井大学教職大学院准教授 小島 啓市

Zone B1 の報告をさせていただきます。B1 の趣旨文にも挙げさせていただきましたが、教職大学院において、管理職候補者となる教員に対する学校マネジメントに係る学修の充実を図り、管理職コースを設置することや、教育委員会との連携による管理職研修を開発・実施することの必要性が謳われています。このことを踏まえ、管理職養成のためのコースを新設する教職大学院が増加しています。今回、文科省担当課を含め、管理職養成コースを既にスタートしている本学教職大学院、兵庫教育大学教職大学院、大阪教育大学連合教職大学院と平成 29 年度からスタートする岐阜大学教職大学院の 5 名の関係者によるシンポジウムを開催しました。シンポジウムでは、管理職養成の今日的な意義や教職大学院の役割などについて、マネジメントリーダーの資質・能力、カリキュラム・マネジメントや「チーム学校」を実現できるような教職大学院のカリキュラムの在り方なども交えながら論議いたしました。

まず、大江 耕太郎氏（文部科学省初等中等教育局教職員課課長補佐）から教員の資質能力の向上に関

する制度改正についてお話がありました。盛んに叫ばれている教員の資質向上の制度改正の背景と概要について、学習指導要領の改訂の方向性と改訂に関するスケジュールの説明があり、それに従って教員も変わっていかねばならないこと、全国的に教員の年齢構成がいびつになっていること、これからの教育を担う若い教員の資質能力の向上のために教員養成のために、共通のビジョンをもとにした教員育成指標により、大学と教育委員会との連携をさらに深める必要があることなどを解説していただきました。



大脇康弘氏(大阪教育大学連合教職大学院教授)からは、全国で初めての夜間教職大学院を立ち上げた大阪教育大学は、現在は、関西大学、近畿大学との連合教職大学院として、教育委員会が連携した大阪型スクールリーダー教育の中心となる「フォーラムー夜間大学院ブリッジ方式」を展開している。管理職や指導主事が働きながら学び、実践的指導力と実践的研究力を高めることを目的としたハイブリッド型大学院であり、大学教員と学ぶ教員との協同した「理論知・実践的対話論」によるスパイラル学習を推進しているとのお話がありました。

篠原清昭氏(岐阜大学教職大学院教授)からは、この4月からの学校管理職養成のための学校改善コースの始動のための準備をしている。このコースは、県派遣の教頭登用試験合格者が学ぶコースで、1年目はフルで、2年目は週1日、大学で学ぶことになる。理論知を活かした学校管理職養成のためのコンテンツ、教育行政や優れた管理職の元での実習や勤務校の改善のための開発実践等を中心にしたカリキュラムを構築しているとのお話がありました。

日渡 円氏(兵庫教育大学教職大学院教授)からは、日本唯一の現職教育長や将来の教育長候補および教育行政の幹部養成のための「教育行政養成コース」について説明がありました。大学教員が院生のもとに赴いて行う「出張講義」やビデオオンデマンド講義など特徴的なカリキュラムについて説明していただきました。併せて全国の教育長のアンケート結果を基に行動タイプ別に教育長が考えているいろいろな視点についての考察を解説されました。

三田村彰氏(本学教職大学院教授)からは、本年度から始まった「学校改革マネジメントコース」の設置

目的、特長や学びを支える仕組みについて説明がありました。特に本学教職大学院は、在籍校の課題解決を目的した在籍校に在籍したまま学ぶ拠点校方式をメインにしており、在籍校の校長も教職大学院のスタッフとして院生の課題解決の支援をしたり、教職大学院の教員も院生の学校に出向いて直接支援したりするシステムの利点について説明がありました。

シンポジストの熱い話を聞いて、教員の資質能力の向上が叫ばれていますが、同様に管理職の資質能力の向上の重要性を改めて感じました。教職大学院は、管理職養成のために教育委員会と連携しながらより学校経営実践力が身につくカリキュラムを構築していかなければならないとも感じました。

シンポジウムの後に行われたフォーラムでは、校種、立場が異なるメンバーで勤務先の実状や実践を語り合うことができました。いつも思うことですが、初対面であっても共通の課題を持つ者同士のセッションは、和やかな雰囲気の中、頷きながら聞き合えるため、大変時間が短く感じられ、有意義な語り合いができました。



福井ラウンドテーブルを振り返って

延岡市立旭中学校 校長 谷口 史子

今回、初めて、福井ラウンドテーブルに2月17日のプレセッションから参加させていただいた。少人

数グループで自己紹介を交えながら意見交換をスタートさせた。私の参加していたグループには、大学の

教授、学校の教諭、管理職に高校生まで含まれており、参加の幅が広いことに驚かされた。大人も交えたグループの中で高校生が堂々と自分の意見を言っていたことも新鮮であり、どんな体験を積む中でこのような力を付けてきたのか興味深かった。少人数での自由な意見交換であったが、様々な視点から意見が出され自分の考えとの違いにも気づかされる良い機会となった。

翌日、2月18日午前中は、特別企画フォーラム「社会に開かれたイノバティブな中等教区の挑戦：財務省との連携に基づく『財政教育のプログラム』の試み」に参加させていただいた。「財政教育プログラム」により、生徒は何を学んだのか、教師は何を学んだのかと言うトークセッションであった。昨日の高校生は、実はこのセッションで発表する生徒であった。発表を聞きながら、なるほどこのような取組を通してこの生徒は発言力も身に付けていったのかと理解することができた。財務省が学校と協力して実践している内容そのものも非常に興味深いもので、貴重な情報であった。

午後は、「ZoneB1 管理職養成の今日的な意義を考えるー教職大学院の可能性と課題ー」に参加させていただいた。ポスターセッション、シンポジウムの後、小グループに分かれて議論を深めていった。

私自身は、校長になって3校7年目を終えようとしている。今までになかった時代を生きていく子どもたちを育てる教師を管理職としてどう育てていくのか、また、管理職としてどのような力を身に付けていくべきなのか考えるところがあった。丁度その頃、平成28年4月に日本で初めて開校するトップリーダー養成の大学院があると聞き、思いついて入学した。兵庫教育大学大学院の政策リーダーコースである。入ってみると、同じような思いや志しをもった現役の教育長、校長、教頭、事務職員、行政職員等多岐にわたる院生集団である。過去の経験や知識だけで対応できる時代ではなくなっていることを十分理解し、その上でトップリーダーに求められる力や考え方を学んでいく。このような自身の現状も踏まえながら小グループでの議論では、意見発表をしたところである。参加しているメンバーはこの場でも同一職はなく幅広かったことから、いろいろな考え方や気づきに触れることができた。

今回参加した福井ラウンドテーブルでは、私が参加したセッション以外でも学校以外の「学び」の機会を持つ方々が参加されており、ポスターセッションに触れるだけでも「教育」の持つ幅の広さを経験することができた。ややもすると「学校完結型」の教育になりがちな自分にとって非常に大きな学びの機会となり、また、参加してみたいと強く感じさせられた。

実践研究 福井ラウンドテーブルに参加して

長崎県教育センター 指導主事 柳本 ますみ

コートを持つことを忘れるほどの暖かさの長崎を出発し、JRで特急と新幹線を乗り継ぎ、途中特急サンダーバード号から雪景色を見ながら約7時間かけて福井に到着した。

1日目のセッションでは、ZONE B1「管理職養成の今日的な意義を考えるー教職大学院の可能性と課題ー」に参加した。教員の年齢層がいびつな現在、将来の管理職層も薄くなっており、その養成は喫緊の課題である。この課題に向けて、現在各大学においては、「チーム学校」のリーダーとして学校をマネジ

メントする校長に必要な力とはどのようなものか、さらにどのようにしてその力を伸ばすかということが検討され、それをもとに様々な取組みが行われている。セッションの最初に行われた話題提供では、その各大学の取組みが紹介された。

大阪教育大学からは、以前からあった現職教員のための夜間大学院や新しく改編したマネジメントコースでの学びについて、岐阜大学からは実習を重視した学び、兵庫教育大学からは将来の教育長を養成するコースが紹介された。なかでも、兵庫教育大学の

日渡教授から示された変革型のリーダーの分析に関する話題は特に興味深かった。さらに、福井大学からは教育委員会や学校の連携を密にした現職教員の学ぶシステムが紹介された。「学校の中で学ぶ」ことを基本とし、校長先生もスタッフとなり学校の課題に取り組む院生を育てるというものであった。大学と教育委員会、学校が一体となって教員が学ぶしくみづくりを進めている事例を知ることができたことは、私自身の大きな収穫となった。

各大学からの話題提供に続き、グループごとの意見交換が行われた。2日目のラウンドテーブルでも

そうであったが、ファシリテーターの方の進行が素晴らしかった。メンバーの意見を引き出したり、気づきを与えてくださったり、深まりのある有意義な時間を過ごすことができた。

また、期間中会場のあちこちで活躍しておられる福井大学大学院生の方の生き生きとした姿が印象的であった。まさに「学び続ける」教師の姿であった。このような「学び合う」しくみづくりが長崎県においても進められるよう微力ながら努めたいと思う。

この2日間は、多くの方と対話し、自分自身と向き合い、新たな視点を得た貴重な機会となった。

B2(a) これからの学部段階の教員養成を考える 実践を聴き、夢を語る

B2(b) 学部学生のクロスセッション 授業/活動 —語ろう・聴こう・出会い直そう—

省察していくことの大切さ

文京学院大学人間学部 助教 渡辺 行野

今年度、初めて「実践し省察するコミュニティ」のラウンドテーブルに参加させて頂きました。日頃より、実践したことを省察する時間を大切にと思いつつも、つい、時間や次の事柄に負われ、「やりっぱなし」になってしまうことが多い気がします。この度、改めて省察することの意味や大切さを再認識できる機会となったように思います。

省察する空間では、互いに耳を傾け、心をひらき、身体全体で話を受け止めていくことが大切になります。じっくり話を聴こうとすることで、何気ない会話も丁寧に味わうことになり、言葉やその中に含まれている意味を整理し、理解が深まります。また、互いの関わりの中で、じっくり省察していくと、何を求め目指していくべきなのか、今まで見えなかったことが見えてきます。これが、様々な分野の視点から省察しあうことの意味なのだと思います。

ラウンドテーブルが一区切りついた時、「言葉やキーワードで説明すると、何か、違う気がしてくる」という会話がありました。これは、省察場面で、じっくり丁寧に話を重ねたことによる、すぐに

は結論のでない思考が始まっている表れだと考えます。私たちは、言葉の重み、言葉の奥深くにある意味を問おうとするとき、言葉一つひとつを丁寧に扱おうとします。そこから、考える脳が刺激され、行為一つひとつに意味を持たせ始めるのだと思います。

今回のラウンドテーブルで、多くのことに気づかされました。ありがとうございました。



福井ラウンドテーブルに参加して

中部大学 三品 陽平

日本全国で実践と省察を繰り返す実践者・研究者が集う「福井ラウンドテーブル」に参加し、その「省察的实践の止まり木」としての役割を強く感じる事ができました。

私は学生の教育ボランティア活動を支援する中で、その活動の改革の必要性を近年感じておりました。しかし、日々の業務の忙しさもあり、なかなか改革に手を付けられないでいました。そのような中、福井ラウンドテーブルにおいて他大学の先生方の教員養成の取り組みや、教職大学院で実習しながら研究をする先生の実践等をうかがい、実践し、省察し、再び実践する姿に強く感銘を受けました。改革に向けたエネルギーをもらった気分です。

省察的实践を継続するにはエネルギーが必要です。実践と省察そのものからエネルギーが得られ

ることもありますが、そうでない時もありますし、それだけで十分でないこともあります。そうした時、所属する組織から離れてエネルギーを養う必要があるのではないのでしょうか。今回の福井ラウンドテーブルは、私にとってまさにそうした羽休みの場、そして次に飛び立つエネルギーを得る場になりました。ほかの方にとってもそのような場所になっていたように思います。

福井大学は「実践し省察するコミュニティ」を掲げられております。このコミュニティは空間的距離を越えて、日本各地の実践者を支える場になっているのだということを実感しました。そのような素晴らしい場に参加の機会を与えていただきましたことに改めて感謝申し上げます。

あらためて自分の実践を見つめ直す機会

静岡大学教育学部 教育実践学専修2年 岸本 大地

この度は、16年の伝統あるラウンドテーブルに参加させていただき、ありがとうございました。まだ大学2年生で、他大学の学生とはまだ一度も関わったことのなかった私にとって、初めて顔を合わせる学生同士で自分たちの実践を語り合うというのはハードルが高く、やり遂げられるかどうか不安でした。しかし、いざセッションが始まると、同じグループになった他大学の学生が気軽に接してくれ、彼らもまた同じ教員を目指す仲間なのだと感じる事ができたので、自分の実践について自信をもって発表することができました。このような経験を大学2年生から経験できたことは、将来教員になるうえで強みになると思いました。

また今回は、他大学の学生の実践を聞き、自分の実践と比較することで、自分たちの活動の成果や課題を明らかにするという目標を立て、このセッションに臨みました。グループでのディスカッションを通して、他大学でも様々な実践が行われていることを知り、子どもたちと関わっていく中で生まれる成果や課題には共通している部分が多いことが分かりました。一方で、自分たちの強みとしてあらためて認識できたことがあります。それは、実践を振り返ることの大切さです。私が所属する教育実践学専修では、小学校での活動後、その日のうちに全ての学年が同じ教室に集まり、自分の実践を振り返り、他者と意見交換をする、「振り返り会」を行っていま

す。こうした振り返りの機会は、他大学では行われていない特徴的な取り組みであり、自分たちの実践をより深く見つめ直し、他者と共有し、次の実践の

改善につなげていくことができているのだと、あらためて感じました。それに気づけたことが、今回のラウンドテーブルでの大きな成果でした。

福井ラウンドテーブルでの学び

中部大学現代教育学部 児童教育学科3年 鳥村 幸平

福井ラウンドテーブルに2月17日、18日と2日間参加させていただき、多くのことを学ぶことができました。

17日(土)では、「Zorn B 2(b) 学部学生のクロスセッション 授業/活動 一語ろう・聴こう・出会い直そう」に参加させていただきました。このセッションでは他大学の学生が行っている活動について知ることができました。例えば、静岡大学は大学1年生の頃から実際に小学校のボランティアに行き、授業の見学や児童と関わるができるということを知りました。中部大学でも小学校へボランティアに行くというものはありますが、中部大学の場合2年生からであり、やはり1年生のうちから小学校の現場で学べるということは多くの教育実践力が身につくと感じました。他に、福井大学のフレンドシップ活動「探究ネットワーク」の報告は組織の運営の課題について聞くことができました。私自身も中部大学のフレンド

シップ活動「わんぱく隊」に所属しているので、今後「わんぱく隊」の活動に活かしていきたいと考えています。

18日(日)では、現場の先生や教育委員会の先生の実践していることについて教えていただき、教師を夢見る私からしてはとてもためになる話ばかりでした。福岡大学附属福岡中学校の先生は「国語の授業におけるアクティブラーニング」について、広島教育委員会の先生は、「広島創生イノベーションスクール」という高校生が行う地域の活性化の取り組みについてお話してくださいました。この機会を無駄にせず私が現場に立った時この中で得た知識を活用していきたいと思っています。

この福井大学ラウンドテーブルに参加させていただき、とても多くのことを得られました。これからもここで得られたことが活かせるよう日々努力していきたいです。

「まとめる」に向き合った15分

信州大学 教育学部現代教育コース4年 小林 礼佳

先日は福井大学ラウンドテーブルに参加させていただきありがとうございました。2日間参加させていただいたうちの、ゾーンB 教師：②これからの学部段階教員養成を考える：「実践を聴き、夢を語る」のセッションでの感想を書かせていただきます。

私以外のグループのメンバーは福井大学の1,2年生でした。初めて参観した幼稚園の子どもたちの様子を、目を輝かせながら語る姿や、小学校の授業を参観したときに抱いた問いに、半年たった今でも向き合おうとしている真剣な表情に出会い、教育に携わる者の一人としてぜひお手本にしたい姿だと感じました。私自身は、教育学部生として経験した子

どもたちとの関わりや他国の学校訪問を振り返り、実践で得た学びと理論的な学びを結び付けながら振り返ることについての所感を発表しました。体験内容や子どもとの関わりについてメンバーから質問やコメントを受け、それらに答える中で自身の学びが再構築されていくように感じました。体験したことを、たった一人ではなく他者と対話しながら振り返ることの大切さを再認識しました。

それぞれの実践の発表を受け、そこから浮かび上がってくるキーワードを探し出す場面がありました。私にとって、この時間が今回のラウンドテーブルの中で最も印象的なものとなりました。私たちのグループは、まずそれぞれの実践に共通するキーワードを探す前に、そもそもキーワードとは何だろうか、キーワードを出すことにどんな意味があるだろ

うか、という問いに向き合いました。短い言葉でそれぞれの鮮やかな経験をまとめてしまうことは、はたして私たちの学びにとって良いことなのだろうか。探し出したキーワードはこれからの経験にどのように生かされるのであろうか。それまで当たり前のようにしてきた「まとめる」という行為の意味を私たちは問い直そうとしました。キーワードを探す場面はほんの15分ほどで、結局キーワードを探すことの意味も、キーワード自体も見いだすことはできませんでした。しかしながら、キーワードに対する問いに向き合えたあの15分間は、これから私たちが教育に携わる道を進んでゆくうえで非常に貴重な経験だったように思います。

ラウンドテーブルに参加して

長崎大学 大学生 左右田 瑤子

私がこのラウンドテーブルに参加したきっかけは、ゼミの担当教員である藤井先生が声をかけてくださったことでした。他大学の学生の人たちと話すことはあまりないので、とても良い経験になりました。特に、同じ教育学部であっても大学によって取り組みが大きく異なることに驚きました。私のグループでは実習の話題で盛り上がりましたが、主免実習以外の実習にそれぞれの大学の特色が表れていることを知り、とても興味深かったです。また、それぞれが頑張ってきたこと、学んだことを発表しあうことで、とても良い刺激になりました。他にも、工学部の方の話

を聞き、違う学部での取り組みについて考える中で、教育とつながるところがたくさんあることに気づき、もっといろんな人と話してみたいと思いました。キーワードは一つに決めることができませんでした。それだけたくさんの方のことを学んだように思います。最後の報告会では、先生方とお話しさせていただくことで、学生同士で話していたことをまた違った視点から考えることができました。短い時間でしたが、たくさんの方と話す中で多くの学びを得ることができました。またこのような機会があればぜひ参加したいと思っています。

Zone C コミュニティ

持続可能なコミュニティを培う

－何がコミュニティの持続的な発展を支えているのか－

福井大学教職大学院 准教授 遠藤 貴広

Zone C は前回まで AOSSA と福井大学文京キャンパスの2会場に分かれて実施していましたが、今回は久々に大学1会場で実施し、オリエンテーションで次のような趣旨説明を行いました。

急進的な改革は見られないにもかかわらず、長年にわたって絶えず発展を続けている取り組みがあります。一方で、当初は理想的に見えても、短期間で頓挫してしまう取り組みもあります。この違いはどこから生まれてくるのでしょうか？ これまで Zone C では、コミュニティの持続可能性に関わる課題を探究し続けてきました。そして、学校以外の場でも人の学びを支える多様なメンバーと協働探究を続けてきました。メンバーの多くは、地域社会の学びの場をコーディネートする役割を担っていますが、それぞれの取り組みを持続可能なものに行っているのは、力量あるコーディネーターなののでしょうか？ 学校内外問わず、コーディネーター役を担っているスタッフが永久に居続けることはありません。定期的にスタッフが入れ替わるのが常です。そうすると、特定の力量ある個人が取り組みを支え続けるという形には必ず限界があります。スタッフが入れ替わっても発展が持続する仕掛けが組織に備わっていなければなりません。それは何なのでしょう？ Zone C では、communityという言葉に地域社会や共同体といった訳はあてず、コミュニティという語が使われてきました。それはおそらく、特定の場所や集団ではなく、そこにいる人々によって営まれているコミュニケーションの構造に目を向けているからでしょう。今回はコーディネーター個人の力量ではなく、それぞれの取り組みの発展を持続可能なものに行っている仕掛けやコミュニケーション構造に目を向け、これからスタッフが入れ替わっても発展を持続させるためにどのような取り組みが求められるか、多様なメンバーで考えていきたいと思い、上記テーマを設定しました。



Session I のポスターセッション後、Session II のシンポジウムでは、報告者に福井市旭公民館主事の竹内きみえ氏と福井大学「探求ネットワーク」学生スタッフの松本恵哉氏・河端尚輝氏の3人を迎え、富永良史氏と宮下哲氏のコーディネートで上記テーマについてのディスカッションが行われました。

本セッション冒頭、富永氏によるファシリテートで上記テーマへの再導入が図られた後、まず、竹内氏から、福井市旭公民館で28年続いている、地域の子どもたちによる水質調査の活動について話題提供が行われました。この活動は最初、学校で行われていたが、やがて学校では忙しくてやれない状況となり、公民館に引き継がれました。しかしながら、水質調査については公民館主事たちも全くの素人であったため、子どもたちの活動を支えるために主事も必死で勉強せざるを得ない状況となっていました。この活動はその後、外郭団体からのサポートも得られるようになり、地域の中核行事の一つになっています。

次に、松本氏と河端氏から、福井大学で22年続いている探求ネットワークの活動について話題提供が行われました。探求ネットワークでは、土曜日等に地域の子どもたち200～250名が大学等に集まり、学生スタッフ150～200名による企画・運営で、9つのブロックに分かれて長期にわたる協働探究プロジェ

クト活動を展開しています。松本氏と河端氏には、全ブロックの学生スタッフが関わる会議をリードする議長を務めた経験も絡めて、活動中どのようなことを考えていたか、活動後どのようなことを考えるようになったのか、具体的なエピソードを紹介してもらいました。

2つの話題から、学び続けられない不安定な状況が持続的発展の契機となること、また、関わる人が増えるだけでなく、一人ひとりに固有の役割が与えられることで、当事者意識を持って実践を続けるメンバーの層が厚くなることの重要性を再認識しました。

SessionⅢのフォーラムでは、5人程度の小グループで、参加者一人ひとりの取り組みがじっくり紹介されました。ここでは、「その取り組みが持続的に発

展しているか」ではなく「その取り組みが地域社会の持続的な発展にどう寄与しているか」といった問いも持つこと、あるいは、「公民館で何をやるか」ではなく「そもそも公民館って何だろう」といった形で、組織(学習)構造を見るフレームを変えてみることの重要性にも気づかされました。



福井ラウンドテーブルに参加した感想

上海師範大学天華学院 張麗珺

2017年2月17日～19日、福井大学で開催された「実践し省察するコミュニティ実践研究福井ラウンドテーブル」に参加させていただきました。初めての福井、初めての福井ラウンドテーブルは印象に残ることがたくさんありました。

まず、800名も越えたという参加者の人数の多さに驚きました。実践研究報告をラウンドテーブルの形式で行われることが印象深かったです。18日の午後には、Zone Cに参加し、3つのセッションにわたって、コミュニティの持続的な発展についてみんなで語り合いました。ポスターセッションとシンポジウムでみんなの実践を物語風に聞かせていただきました。フォーラムでは、語り手として、今までの日本語教育におけるコミュニティの発展に係る実践を語りました。19日に、報告者となって、日本文化を取り入れた日本語教育の実践を報告しました。1日にわたって、くわしく実践を語り合うことはなかなか得ら

れないチャンスですし、グループのメンバーの報告からも学ぶことが多く、とても勉強になりました。

また、大学生の自発的な活動振りも印象的でした。ポスターセッションにもZone Cのシンポジウムにも福井探究ネットワークという初耳の言葉がキーワードとなりました。福井大学教育学部の授業の一環として探究ネットワークが展開されています。大学生が持続的に地域の子供たちと一緒に活動したり、報告用のパンフレットやポスターを作ったりして、実践してきたことを発表する姿もラウンドテーブルのいい風景なのではないかと思います。大学生の実践報告も興味深く聞きました。

2日間のラウンドテーブルはハードスケジュールでしたが、今後の実践につながるものだと思います。

この度は、福井大学の教職員の方々に大変お世話になりました。感謝の意を申し上げます。どうもありがとうございました。

「みせる」ということ

玉川大学 教育学部教育学科3年 高澤 昌平

福井のラウンドテーブルに初めて参加させていただきました。1日目「zoneC 持続発展可能なコミュニティ」と題し、福井大学の学生をはじめ、地域の公民館や市民団体の活動報告を聴きました。普段大学では学校教育のことを中心に学んでいるためか、公民館や児童館、学生の活動報告は、とても新鮮で刺激的なものでした。中でも福井大学の「探究ネットワーク」は、私たちが報告させていただいた活動と似ている部分があり共感を覚えました。「探究ネットワーク」は学校全体を巻き込み、年度が替わり、リーダーが変わっても、持続していく組織作りが確立していました。私の活動は持続していくことを全く考えたことがなかったため、学生の活動報告はとても興味を惹くものでした。

「探究ネットワーク」は、年度ごとにカラーが違い、自分たちがやりたいことをやると話していました。1年生から先輩と活動をして、学年が上がり執行代になって、その学年のやりたいことをやる。それでも大枠の部分を残して、活動の幅を広げ、次世代に繋がっていく。私はその要因が「見せる」ことにあると思います。ある学生が報告の中で「去年の探究を超したい」という思いで活動してきたと話していました。先輩から「見せ」られた背中を追って、また次の世代がまた後輩に「見せる」。そうしたサイクルがあるからこそ「探究ネットワーク」は学校全体を巻き込み、リーダーが変わっても持続していると思いました。

私もこれからの活動で、学びを「見せ」成長を「見せる」ことで周りを巻き込み「満足した学生生活でした」と言えるように頑張りたいです。

2日目、小グループで私の活動報告をさせて頂き、自分の実践を振り返るとともに、アドバイスを頂いたり、他の方の話を聞いたりする中で、改めて自分の活動と比較し、考えを深めることが出来ました。またグループで話を聴くことが自分にとっては、大きな学びにつながりました。グループには、学校教育に関

係する方が多く、現場の話を聴くことが出来ました。中でも「アクティブラーニング」の話は、興味深かったです。小学校現場では今までもしてきた。高校現場では、受験があるため、生徒がそれを望まない。具体案がない今の状況では教員も腑に落ちないという話でした。今まで私が大学で抵抗なく学んできた「アクティブラーニング」という言葉について改めて考えさせられました。抵抗なく受け入れられることに、一度疑問を持つことも大切だと思います。2日目の活動報告は自分の価値観が大きく揺さぶられる体験でした。

今回聞かせていただいたどの活動も、初めは小さな活動が、多くの人を巻き込み次第に活動の規模が大きくなっていました。上智大学の大学院生が、報告の中で話していた「志縁」と「地縁」という言葉が印象に残っています。志をよりどころに、多くの人が地域に根付いて大きくなっていく。その両方がなければ活動は持続せず、大きくならない。その両天秤で活動を広げ、地域の人に必要とされる。私はこの言葉にも「みせる」意味が含まれていると思います。つまり志を「見せ」人が集まり、地域に「魅せ」活動が根付くということ。そんな集団が持続発展なコミュニティを作る一つの要因だと感じました。

この2日間多くの活動報告を聴き、自分の活動の可能性を感じるとともに、大きな学びを得たと実感しています。実践を話し、意見を交換し、考えを深めることが出来る。他人に「見せ」他人の話に「魅せ」られること。これが生涯学習で重視される「学びあい」というものに繋がると感じました。この経験を糧に今後も活動に力を入れていきたいと思っています。

福井のラウンドテーブルに参加できたことは私にとってとても大きな経験です。この機会を与えてくださった福井大学教職大学院の皆さま、誠にありがとうございました。このラウンドテーブルで学んだ

ことを今後を活かしていくとともに、周りの友人や後輩等にも伝えていきたいと思います。

いろいろな学園グリーン・ヒルズ小中学校 スクールカウンセラー 藤村 かおり

初めて参加させていただきました。初福井！初ラウンドテーブル！！

一言で言うと、とても楽しかった。そして不思議な居心地の良さがありました。

ゾーンCへの参加でしたが、実践を聞かせていただきながら、周囲の人たちと語りながら、何か、いっしょに体験しているような、引き込まれていくような感覚がありました。同時に、これまでの自分の実践とつなぎ、振り返り、その中で湧き上がってくるものを自分の内に、ひとつひとつピンで留め直す作業をしていたように思います。それは、何とも言えない楽しい時間でした。そこに居る誰をも暖かく包んでくれる、自由で開放的な空気も私の背中を押し続けてくれたと思います。

初めて出会う方々、バックグラウンドも普段の生活も違うたくさんの方々と対話が詰まった二日間を終えて、私の中にはエネルギーが満ちていました。何が大きく私の内に響き、染み入って行ったのかはわからないけれど、何かが大きな音を立てて開いたような感覚。

初めての参加でしたので一体何なのか解らず、まずは遠藤先生のオリエンテーションに聞き入りました。『何が持続的発展を支えているのか？』、「スタッフ、リーダーが居なくなっても、システムとして続くには…」に『子どもの悩み 110 番』の世代交代を重ねました。

ポスターセッションは、多種多様多彩な活動の実践が掲示されており、興味深かったです。今までは親受けする芸などを仕込んでいた園が”アクティブラーニング”に方針転換したら・・・を聞いて、小・中学校もその本質を理解した上で早く実践して欲しいと願わざるを得ません。

次のシンポジウムは、公民館が地域の親子活動と

そして、日常に戻った私は、その時、暖め続けたものを周囲に伝え始めています。

学校の子どもたちへ、同僚へ、家族へ・・・広い世界へ出よう、たくさんの人との出会いはきっと自分を拓く。いっしょにやってみようよ、今、考えていること思うこと。伝え合おうよ、きっと何かが変わる・・・

化学反応が始まった？私から溢れた福井効果？！エネルギーの拡散は、次から次へと笑顔を生み出し始めています。ここから何が動き出すのだろう、次に何が始まるのだろう。目に見えないウエーブにわくわくしている自分。

今、何かをつかんだ自分が、何かを発信し始めている。その大事な「何か」を確かにするために、またここから前へ進み始めよう。新しい出会いにわくわくしながら。

今回、ラウンドテーブルに参加する貴重な機会を下さった方々、この二日間の中で出会い、語り合い、豊かさや深まりを下さった方々に心から感謝いたします。

あすわクリニック 小児科医 坂後 恒久

して近くの川の上流から下流までの水質検査を30年近くも続けている、それも子どもたちが自転車で追いかけ、親や交通パトロール隊のお年寄りがそれを支え、公民館職員がさらに支援という取り組みの紹介でした。もう一つは、探究ネットワークでした。

最期のフォーラムは5人ずつのグループになってのラウンドテーブルで、市の中央公民館長さん・探究メンバー・三鷹市でボランティアで市民大学をしている方・留学生さんにボクでした。

ボクにとっては異業種の方々と、活動はとても新鮮で学ぶことがとても多く、100分はあっという間でした。

また次の機会があればぜひ参加したいと思っています。

生き合わせの地域に向けて

合同会社 Roof 佐伯 亮太

「コロコロのムッタ…頭を大量の情報でいっぱいにするのは何かを考えないためか…？」漫画・宇宙兄弟で宇宙飛行士を目指す南波六太は、何かあるとテレビ・ラジオ・雑誌・新聞を同時に手に取り、雑念が思い浮かばないほど頭の中を情報でいっぱいにする。

2016年2月、偶然見かけたポスターを頼りに、「実践し省察するコミュニティ 福井ラウンドテーブル 2016 スプリングセッション」に参加した。約1年前の出来事である。その帰り道はそんなムッタの気分がよくわかった。2日間で大量の情報が押し寄せて、うまく処理できない。振り返ろうと思っても、どこから振り返って良いかもわからない。そんな濃密な体験だった。無論、2017年のラウンドテーブルも同じであった。

めったに雨の降らない瀬戸内海沿岸に住む私にとって2月の北陸地方は、なにか灰色の空気とともにあった。1年前とは立場も心持ちも全く違う。1年前の私は明石高専特命助教として地域と学校のコーディネートをすすめていた。その後、ある想いから、Roof(ルーフ)という名の小さな地域づくり法人をつくった。地域と学校のコーディネートを進めれば進めるほど、地域と学校を取り持つには片方からのアプローチだけでは無理が生じると実感したのである。そんなこともあって、宙ぶらりんな立ち位置で参加できる今回のラウンドテーブルを非常に楽しみにしていた。

私の参加した ZoneC のテーマは「何がコミュニティの持続的な発展を支えているのか」であった。これほど答えのない問も無い。いや、この答えが出れば多くの地域が困っている諸課題が解決されるのかもしれない。会場は相変わらず、すごい熱気だった。そしてよくわからないごちゃまぜの場だった。ファシリ

テーターの富永さん※1に促され、挨拶もほどほどに会話した隣の女性は、上海から来ていた。コミュニティという抽象的な言葉の定義をお互いに探り合った。

4人に分かれたフォーラムでは、非常に興味深いメンバーと出会えた。この4月から大学に進学する女子高生・福井大学探求ネットワークの学生リーダー・福井大学探求ネットワークの2年生。Zone Cのテーマにぴったりであった。かねがね、学生が地域へ関わる際の「上手な引き際」を考えていた。学生が地域に関わると良いも悪いも世代交代が起こる。ある年度に偶然カリスマリーダーが現れて、強烈な成果を出したとしても、それを引き継げないとプロジェクトとしての価値がつかれない。どうすれば世代交代するたびにプロジェクトがブラッシュアップされるかに興味があったのである。

リーダーの彼もそれに悩んでいた。時間もかけているし、たくさんの議論も重ねている。それでもうまくいかない事があると。2年生の学生とは見ている角度、見えている全体像が異なる。それがメンバーの間でうまく共有できていない。良い葛藤だと思った。ただそれを一人で抱えることは良策では無いと話した。

昨今、学生の学びの場として地域が注目されている。若者に参加してほしい地域と、よりリアルな実験を経験させたい学校は妙に利害関係が一致する。ただし、それぞれが目指すゴール・求める結果は一致しにくい。だからこそ、プロジェクトをキックオフさせるとともに対話を進め、地域・学校がお互いについてより深く理解することが求められるのだ。世代交代の問題もここに解決の糸口があるのかもしれない。

若者と対話の中では、「何がコミュニティの持続的な発展を支えているのか」という問いに対する答えは見つからなかった。ただその場を見渡して、このラウンドテーブルが継続されていることが、コミュニティの持続的な発展に寄与しているように感じた。そこには地域・公民館・教育機関・人、それぞれがそれぞれの役割を担って地域に参加する姿勢が見えた。「大学生ってこんなことするんですね。」最後に4人で感想を言い合った時、女子高生がポツリと話した。大学受験に向けて必死になった高校生にとって、大学で自主的にプロジェクトを進めることは、まだリアリティを持って捉えられなかったのだろう。彼女にとっても良い刺激を得られたのではないだろうか。

2日間のラウンドテーブルが終わり、また情報で頭をいっぱいにした私は、フラフラと大学構内を歩いていた。偶然通りかかった富永さんが「佐伯さん、駅まで送っていくよ！」と颯爽と私を車に連れ込んだ。他愛もない会話の中で、「打ち合わせをするというよりも、息合わせ（いきあわせ）をしておくんだ」と彼は言った。情報でパンパンになった私の頭にもすっと入る言葉だった。そして、フォーラムでの若者との対話、最終日の1日かけたラウンドテーブルでの出会い、福井の人材の循環、地域への愛・想いなどを理解していくと、「生き合わせ」という言葉が浮かび上がった。その場にいる人・その場に関わる人が偶然の巡り合わせで地域に関わり、お互いを認めあう。それぞれの生き方、生きることが合わさって地域が共創



されているのだろう。その雰囲気は福井のコミュニティのベースにあるのではないだろうか。

福井から戻ってしばらくして、事務所に丁寧な手紙とともに1冊の本が届いた。送り主は佐々木さん。お会いしたことのない方だ。偶然出会った方から「道場さん」の存在を教えてもらった。私が道場さんに興味を持ったことを知り、わざわざ送ってくれたのである。そこには、21世紀に入って私達が進めてきたフランクな地域づくりとは一線を画すような、歴史の上にある地域づくりが垣間見えた。ここに福井のローカリティが詰め込まれているようにも感じた。地方は衰退していると言われて久しい。しかし、その地が持つ歴史・リソースを今一度捉え直すことで、地域は持続し、緩やかな発展につながるのだろう。つまるところそこに登場する人と人の「生き合わせ」の上に、地域が成り立ってきたのだろう。

※1. 富永良史さん 福井大学非常勤講師・ファシリテーター

Zone D 授業研究

子どもと教師の学びを支えるために授業研究をいかに組織するか

福井大学教職大学院 准教授 天方 和也

ZoneDは前々回、前回に引き続き「専門職の資本」という視点に基づき、上記のテーマの下で各 Sessionを進めた。

元来 ZoneDは ZoneA「学校」から 2012 に派生したセクションで、当初からのテーマを辿ると「教科を問い直す／なぜ学ぶのか」「教科で自己を問えるのか」「授業改革の扉を開く」「教師は授業で何を残したいのか」等々があり、「そもそも授業とは何か？良い授業実践とは？」といった授業に対する根源的な問いとも言うべき視座を持ち続けながら回を重ねてきた。



Session II シンポジウムでは、次期学習指導要領は、その中の「教科等を学ぶ意義、育成を目指す資質・能力、主体的・対話的で深い学び」などの文言に象徴されるように、正に ZoneDの歩みと、内容及び方向性が通底しているとの認識から、「次期学習指導要領改訂に向けて授業研究をいかに組織するか」というテーマで鼎談を行った。鼎談者は福井大学教育学部附属中学校の森田史生教諭、埼玉県立新座高校の金子奨教諭、玉川大学教育学部の石井恭子教授の3名である。(鼎談の途中には、フロアの参加者が小グループごとでテーマや鼎談の中で出た内容について話し合い、それらの声を拾い上げ鼎談者にフィードバックするというセッションも行った。) 以下に、Session II で出された主な意見等を項目ごとに記す。

〈カリキュラム・マネジメント〉

○カリキュラム・マネジメントは教科横断的な取組が求められている。換言すると教科越境、脱教科書ということも言えるのではないかな。

○各学校独自の教育課程編成が必要である。その要は「コンテンツからコンピテンシーへの転換」である。

○福井県では中学校、高校の「教科縦持ち」が一般的に行われているが、今後小学校との連携が課題である。

○2017年度開校の福井大学教育学部義務教育学校では、9年間のつながりを「どのような子どもを育てるか」という点で考えている。

〈深い学び〉

○深い学びは、単元をストーリー化すること及び、それに対する振り返りを行うことで可能になる。

○様々な形で立ち上がってくる考えを間主観的に同意していく過程が深い学びである。

○子どもの中で、深い学びが行われたかどうかの評価や可視化が必要である。

○元々パッシブで、それを特徴とする人間もいるので、能動—中動—受動という段階を踏まえた上でアクティブラーニングを捉える必要があるのではないかな。

○理科の学びの本質は、理科的なものの見方・考え方であり、社会科の学びの本質は先人からの継承である。

〈授業研究〉

○教師の協働は全てが一致していなくても良く、ベクトル(方向と量の大小)が一定の枠内であれば良い。

○協働においては各教師のバルネラビリティ(脆弱性)に着目することが、協働することにおいて強みとなることがある。

Session III フォーラムでは、Session II での鼎談を踏まえて、「子どもと教師の学びを支える授業研究の実践」のテーマの下、以下の4グループに分かれて実践報告、グループ討議を行った。

A. 学校における授業研究の多様性から学び合う

A-1 信州大学附属長野小学校の実践 福井大学教育学部附属小学校の実践

A-2 福岡教育大学附属福岡中学校の実践 越前市武生第一中学校の実践

B. 高校における授業研究の発展

大東学園高等学校の実践 福井県立敦賀工業高校の実践

C. 授業研究の国際展開

ここでは、私が司会をしたA-1を報告する。信州大附属長野小は淀川茂重先生の教育理念を基に、児童を中心とした総合学習を実践している伝統ある学校である。大藪勝教諭から、動物との触れ合いや手づくり楽器等の実践における児童たちの生き生きとした姿や、それを実現するための「子どもと共に在る授業」や『教師が問うこと』を支える研修・研究の在り方が報告された。その中では具体的な教師間の協働・交流の様子も紹介された。それらを踏まえた上で、子ども・材に対する教師間の関係を「同僚性」というキーワードを用いて省察し、「問い続ける教師を目指すこと」の重要性を論じた。

2つ目の報告の福大附属小は「自主・協働・探究」を教育目標に掲げ、長年にわたり授業研究を積み重ねてきた学校である。渡邊淳子教諭が、「子どもの小さな変容を大事に見とり続けること」を核にした授業研究の在り方や、「各コミュニティ研究会、事前研究会(教科ペア)、バズセッション」等の様々な組織による研究会、「開始期、実践改良期、充実期」という時期による授業研究の内容的変遷、及び「多様なグループ編制、ブレインストーミング、付箋紙の活用」等の具体的研究方法を報告した上で、「進化・生長し続けるコミュニティ」の重要性に言及した。

終了後に各グループのファシリテーターの方からいただいたグループ討議の記録を読むと、信州大学附属長野小学校の授業研究における同僚性の高さ、福井大学教育学部附属小学校の授業研究の組織性と計画性の高さの2点に関する話題が中心となっていた。具体的には2校の実践に対する共感や賞賛・憧憬及び自らが所属する学校の授業研究との比較・省察等である。「同僚性と組織・計画」の2点に関しては、同僚性の高さにより授業研究が進展するのか、或いは組織的・計画的な授業研究が同僚性を充進するのかという問題設定も可能であるが、授業研究は、各学校の伝統・文化・地域性及び管理職・成員の実態等々の多くのパラメーターによって構成、進展していくものであり、「同僚性と組織・計画」の2点が必要である」という共通理解の下、授業研究を実践していくことが重要であることを再確認した次第である。

Session IV

Round Table Cross Sessions

実践研究 福井ラウンドテーブルに参加して

広島大学 准教授 佐々木 哲夫

近年、福井にはご縁がある。数年前の公立中学校長時代、主任等 5 名とともに 2 日間にわたって福井市内の二つの中学校を視察させていただいた。そのうちの 1 校が安居中学校であった。目的は、全国学力学習状況調査において常時トップクラスに定席を持つ「福井教育」の真髄を探りたいがための教育視察であった。往路、車中での私も含めて主任等が交わした会話、さぞ狭義の教科学力優先の教育活動が展開されているであろうという先入観の粉碎は、当該校の門をくぐってそう多くの時間を費やさなかった。認知能力のみならず、対人間関係能力、総合的な人間力を求めた 21 世紀型能力の育成を目指し、キャリア教育を基盤とした地域とともにある学校を展開される中で、エネルギー且つ堅実な生徒たちの活動を目の当たりにしたのである。

時は巡って一昨年の初夏、初めて本ラウンドテーブルに参加した。その一コマのポスターセッション会場で、視察当時 1 年生の生徒たちが 3 年生に成長し、多くの大人集団に取り囲まれる中、自分たちの活動の取組、また自校の素晴らしさを原稿なしで誇らしく発表しているではないか。本ラウンドテーブルを初めとする福井大学を核とした「福井教育」の営みの厚さを垣間見て感服した。

そして、今回 2 回目の参加となった本ラウンドテーブル。特徴の一つである多校種の教員、学生・院生、

教育行政職員、社会教育関係者、民間企業関係者、保護者等が津々浦々参集し、多面的・多角的な見方、考え方を熱く交換する討議は健在であった。自らの実践研究に対する他者の批評を真摯に受け止め更なる力量形成を図っていこうとする高い志や意欲、併せて、討議を通して参加者個々が自らの思考の高質化を図り、協働で新たな価値を創造していこうとする過程は、私自身にとっても成就感を味わうことができ実に心地良い時間であった。32 回目となった本ラウンドテーブル、毎回 500 人を超える盛況ぶりであると伺う。その要因は、この場が研究的省察を行い理論と実践の往還を体現できる絶好の機会であると確信するものであり、これまで長年にわたって本ラウンドテーブルの発展に努めてこられた福井大学教職大学院の諸先生方を初めとする関係者の皆様方に心から感謝と敬意を表したい。

PS ラウンドテーブル最終日の翌日、本学教職大学院院生と安居中学校を再度視察させていただいた。前記した経営方針に基づくカリキュラムマネジメントは一段と磨きがかかり、生徒たちも相変わらず精悍で澁澁とした姿を私たちに見せてくれたことを付記する。

スプリングセッションに参加しての感想

神奈川大学 理学部 4 年 和久田高之

スプリングセッションに参加して、報告者として話しながら様々なことを考えたり、多くの人の話を聞きながら色々な人の経験が心に残ったりしました。その中でも、私が特に強く感じたことを 2 つ紹介させていただきます。

1 つ目は、自分を見つめ直すことの重要性を再確

認し、より自分の経験を振り返る機会を作りたいと思ったことです。今回のスプリングセッションで、ラウンドテーブルの報告者として話す機会をいただきました。私の経験は、決して壮大なものではありませんが、1 年以上通じて行ってきた留学生との交流についてです。自分で自分の経験をまじまじと振

り返る機会はほとんどなく、話す内容を考える時点で経験しているときには考えなかった多くのことに目を向けることができました。また、話しているときにも、実はこんなことにも気を付けていたと、少しではありますが客観的に自分を眺めることができたように感じます。私にとって、このように自分をみつめることはラウンドテーブルがなければなかなか経験できないことでした。私は、来年度から教師として働きます。今回の経験を活かし、自分を見つめる機会を増やし、よりよい授業とは何か、よりよい生徒とのコミュニケーションとは何かなど考えていきたいです。

2つ目は、教師間や職種による考えや視点の違いによる多様な考え方に気付くことができたことです。スプリングセッションでは、教諭や校長先生など学校職員だけでなく、公民館の方や大学生（大学院生）など様々な人が参加していました。そのような多様な人と話すことは新しい発見がとても多かつ

たです。ラウンドテーブルでは、特に印象深い場面がありました。自分にとっては当たり前と思っていたことが、他の人にとっては当たり前ではないことだったり、ましてや考えが反対だったりしました。大学での生活は、比較的、考えや価値観の似た人との交流が多かったです。それは、自分に似た人と一緒に過ごした方が、居心地がよかったからかもしれません。しかし、今回の経験で、自分とは異質な人との交流もとても面白いと感じました。そして、様々な考え方や視点があるということに気付くことができたことが非常に勉強になりました。今後も、様々な人と話をしたり聞いたりして、少しでも自分を成長させていきたいと思います。スプリングセッションで感じた多くのことを糧にこれから頑張っていきたいと感じました。今後、いろいろな経験を積んで、またこのような素晴らしい経験のできるセッションに参加したいです。

同じ「想い」と、違う「視点」で省察すること。

—福井ラウンドテーブルに参加して—

早稲田大学 文学部教育学コース4年 真鍋 京祐

福井大学教職大学院によって実施されている福井ラウンドテーブルに、2015年6月から継続的に参加してきた。学部を卒業し4月から教員となるため、一つの区切りとして、2017 Spring Sessionsを中心に、一度まとめさせて頂きたい。

今回のラウンドテーブルにおいて、私のグループには、小学校教諭・中学校校長・高校教諭・学校教育行政職員と、学校現場に携わる方々ばかりであった。私が大学で関わってきた、模擬選挙を中心とした小学校・高校への出前授業実践等について報告した。それを通じて感じてきたこと・考えてきたことについて、活動を振り返りながら語らせて頂いた。

私自身、実践を行う中では様々な困難を乗り越えながら展開してきたという思いもあり、ある程度の達成感を抱いていた。しかしながら、異なる視点・考え方を持つたくさんの方々に話を聞いていただき、自分だけでは気づくことの出来なかった改善すべき点やその方策など、様々な意見を頂くことによって、もっとより良い形に発展できるのではないかと、さらなる高みを目指すことが出来るのではないかと、多くの刺激を感じることが出来た。そんな感情が、実践

の内容だけでなく、私自身の成長のエネルギーになっていくと感じた。

さて、これまで4度の福井への参加を通じても感じてきたことでもあるが、立場は違えども、教育・子どもに対する思いを同じにするグループでの語りから、再確認したことがある。

どのような活動においても、結局のところ、教育の場面に正解はない。これは現場に立つことでしか本当の意味で感じることは出来ないのかもしれない。そんな中でも、私が大切だと感じることは、ただ実践するのではなく、それを「継続的に」行うこと、そして一つ一つの実践を「振り返りながら」展開していくことである。

それに加えて、私が福井ラウンドテーブルで感じたことの中で、最も重要であると感じたのは、「省察の目的の確認」である。それは普段、実践を構築する中でも、どこか感覚的に行っているものであったが、福井への参加を通じて、本当に大切にしなければならないのは、「何のために」省察するのかということだと感じた。

多様な背景を持った人が、様々な切り口から実践を構築している。その様を見ると、それぞれの実践が目指すものは全く異なるもののように見える。しかし、実際のところ、それぞれの本質には、子どものため・人々のため・社会のためといった、教育の可能性に根差した「想い」がある。

もちろん、自身の「想い」を大切にすることは大切なことである。あらゆる実践は、それに基づいて行われるものだろう。ただし、それだけではその実践に広がりや深まりはない。活動をより良い形に発展させていくためには、それまでにはない視点を獲得していくことが必須である。

教育というものを同じ目線で捉える人々が、それぞれ異なる方法・手段で実践を生み出し、それぞれの

実践を語りながら、それぞれの視点を共有し合っている。そんな人々の集まる空間が、福井ラウンドテーブルには確かにある。

このような、同じ「想い」を持った他者とともに、違う「視点」から互いの活動について語ることが、自分にも周囲にも非常に価値のあることだと感じる。私自身これからも、意識的に振り返りを大切にしていきたい。

学部卒業を区切りとしたが、教員になる私としては、これまで福井で得たものを如何にして今後活かしていくかということが大事だと認識している。新たな経験・視点を積み、一回り大きくなった教育実践者として再び福井ラウンドテーブルに参加することの出来るよう精進したい。

ラウンドテーブル(クロスセッション)に参加して

東京大学 特任研究員 村瀬 公胤

・出会い

もう何回目になるであろうか、今年もまた、福井のラウンドテーブルに参加した。大学院生、教員・研究者、コンサルタント等々、参加するたびに自分の肩書きは変わっても、このラウンドテーブルが学びの場であることは、不変である。

考えてみれば、ラウンドテーブルで出会える人々もまた、属性が様々である。ただ一つ「学びたい」という気持ちだけを共通の持ち物として卓を囲む、一日かぎりの仲間がそこにいる。そのためなのか、ラウンドテーブルの学びは、いつもなにか純粹で静かな喜びに満たされるような気がする。

・振り返り

実績を積んできた方が、過去の自分を振り返る。時に痛切な悔恨さえも含むその語りに耳を傾け、教師として生きることの深さ、果てしなさに思いを巡らす。これから校内では中堅を担い、後進を育てるであろうその人は、しなやかな優しきで導いてゆくにちがいない。

夢を持つ若者が、迷いを吐露する。ほんとうに正し

いことって、どれなのだろう。いや、正しいかどうかを、私が決めてもよいものかさえも分からない。そう、そうなんだよねと、私たちは頷き合う。迷うということほど、真理に近いものはないと思う。

新しい試みに躍動する人が、その奮闘の風を吹きつけてくれる。まるで私たちもそこにいるように、ともに驚き、ともに喜び、ともに胸を熱くする。良き仲間に触れることは、私たちの成長の糧である。関わり、巻き込むことで、また次の挑戦が生まれるのだろうなど、期待が膨らむ。

・学び・

なぜ、出会いのあるところに、学びが生じるのか。化学変化とか相互作用という見方もあるかもしれない。しかし、このたび体験したのは、それともややちがうような気がした。属性を離れたとき、人はこうも自由になれるのかと感じた。「私」という殻が外れた、生身の感覚がある。耳は、鼓膜という繊細な皮膚でできた器官である。文字情報では捉えきれない、伝えたいことの総体を、まるごと受けとめる対話、ラウンドテーブルの愉しみ、聴くことの喜び。

実践の「昨日」と「明日」をつなげるラウンドテーブル

NPO 法人ダイバーシティ工房 綾部 太輔

始発に乗るべくして旅立った2月18日の朝。新幹線の中で、報告資料を作成しながら、初めてのラウンドテーブルへの期待と不安で4時間の移動時間はあっという間に過ぎていった。ラウンドテーブルには今回が初めての参加であり、福井を訪れるのも初めてで、初めてづくしの2日間であったが、実り多き2日間であったことをまず記しておきたい。

私は、2015年4月より千葉にあるNPO法人ダイバーシティ工房にて、発達障害の子どもやその家族が安心して学び、相談できる場の1つとして放課後等デイサービス事業所（スタジオplus+）での学習支援を中心とした活動を行なっている。今回のラウンドテーブルでは、＜「発達障害児」への学習支援と第三の場所について＞というテーマで、福祉サービスの1つである放課後等デイサービスと、スタジオplus+で行なっている学習支援についての報告をさせていただいた。

実践報告ということでは、ある授業や児童・生徒についての実践や事例について報告することが求められていただろうが、今回は自分自身が活動している現場と活動内容、そしてどのようなことを目指して日々活動しているのかという3つの点について報告を行った。このような報告になった理由としては、初めてのラウンドテーブルへの参加だったため、どのような報告が行われているのかということを知らなかったという面もあったが、様々な現場や地域で活動している人々が集まる場において、自分が行なっている活動や取り組みの報告がどのように受け止められ、どのような反応がかえってくるのかということを知りたいということも大きかった。

2日間の中で、小学校教諭、現職大学院生の中学校教諭、大学生、国際交流協会スタッフ、大学教授といった様々な分野で活動している7名の方々とセッションを交えることができた。発達障害の子どもへの学校以外の場での学習支援やサポートの必要性について共感していただいたり、放課後等デイサービスという福祉サービスが全国で利用できることなど新しい発見をしてもらえたことは、私が報告する

ことで目指していたことが、少しは達成することができたのではないかという思いをもつことができた。

自分の報告に耳を傾けてもらい、問いを交わしながら、それぞれの場や活動と関連づけながら、意見や感想を返してもらおうというラウンドテーブルのやり取りは、これまであまり経験したことがなく、とても新鮮であり、充足した気持ちで東京へと帰っていくことができた。始まるまでは、報告の時間が余ってしまったり、話が続かなくなってしまうのではないかという不安もあったが、ファシリテーターの方の進行と場を共にした方々の語り合いによって、セッションの時間はみるみると過ぎていき、不安は嘘のように解消されていた。また、報告を聴き、その報告に対して、自由に語り合っていくという機会も、私にとっては刺激的であった。その実践の背景にあるもの、報告者が実践を通して感じたことや今後についてなど、一期一会の出会いから語り合い、話を深めていくというやりとりを楽しむことができた。

実践をまとめ、報告することは、自分自身の歩みや活動を振り返ることであることを、行きと帰りの新幹線の中で噛みしめることとなった。今の団体で活動し始めてから2年がたとうとしている中で、ラウンドテーブルに参加することができ、活動を行おうとしたきっかけや経緯、活動を行う中で感じていること、今後目指すべき方向といったことを言語化し、今一度整理していくことができたように思う。

それぞれの場で活動してきた人たちが集い、ラウンドテーブルが終われば、またそれぞれの場にもどり、日々の活動を続けていく。一期一会に集いし人たちが昨日までの実践に耳を傾け、明日からの実践へとつなげていく語り合いは、互いの健闘を讃え、応援しあうエール交換のようにも感じられた。昨日までの実践と明日からの実践をつなげるラウンドテーブルにぜひまた参加させていただきたいと思っている。

拝啓 自分

福井大学教職大学院 教職開発専攻2年 増谷 淳

本原稿を執筆している3月上旬。福井大学教職大学院を巣立つ時期に近い今日この頃にもなると、ラウンドテーブルという単語が私自身の中できなかなり馴染んで来たことに気づかされる。この2年で県内外のラウンドテーブルに多数参加させていただく機会があったため、今一度これまでの経験を以下に振り返らせていただく。

(1)初参加ということで周りの熟達した雰囲気や圧迫された2015年6月。「ラウンドテーブルとか言いつつ机四角いぞ？ここは何をするところなんだ！？」とラウンドテーブルの意義をまだまだ見出せなかった。聴き手としての参加だったこともあり、常に受身だったかもしれない。教育界には「凄い人」たちが大勢いるのだと知った。

(2)初の県外参戦となった2015年12月(主催:明治大学)。社会教育の専門家が、多分野の方々が集う面白さに少しずつ気づき始めた。普段話す機会がなかった公民館主事の方などのお話は実に新鮮であった。

(3)院生の取組をポスターで共同発表したり、1年目の実践研究を報告したりした2016年2月。発表者や報告者を経験したことで、貴重な意見を頂く喜びを知った。普段の取組を語ることで省察するというラウンドテーブルの意義を体感することができた。

(4)荒瀬克己先生(大谷大学)や篠原嶺先生(奈良県・中学校教諭)など豪華な面々と机を囲んだ2016年6月。先生方の話をお聴きする時間も、私自身の実践を語る時間も、とにかく楽しかった。何が凄いかは簡単には言語化できないが、「凄い人」たちに出逢うことができた。貴重な出逢いもまたラウンドテーブルの面白さの1つといえる。

(5)若手教員が集い、各々が実践を語り合った2016年8月(主催:奈良女子大学)。この頃には、新たな出逢いに期待し意欲的に参加している自分がいた。多くの出逢いの中で私も省察を行うことで、自身の成長を少しずつ実感することができた。

(6)参加者に学部卒院生が多く、新たな同志と出逢うことができた2016年11月(主催:長崎大学)。福井と長崎では同じ院生でも研究方法や学び方が異

なり、違いを肌で感じつつ自分たちの実践の良さに意味を見出すことにもなった。教員を志す身として、普段の実践意欲をさらに高めるきっかけとなった。

そして、大学院生としては最後の参加となった2017年2月。今回は2年間の実践研究について、長期実践報告書と共に語るいわば集大成の場となった。どの参加者も私の報告を優しく受け容れてくださった点は毎回共通のことであったが、これまでの6度のラウンドテーブルと比べると、また異なる良さを感じた。その理由を2点挙げる。

第一に、私の中でのラウンドテーブルの意義が確立してきたことがある。様々な場で、様々な方々と語り合うことをこれまで経験してきたおかげで、語り合う場の面白さに気付くことができた。語り手がただ一方的に報告するのではなく、参加者が語り合うことで全員が学ぶ機会にすることができる。貴重な出逢いの中で新鮮な気持ちで学びを得ることができるのはラウンドテーブルの良さといえる。

第二に、2年間の長期実践を語ったことが挙げられる。長期的視点で実践を語ったことで、聴き手の方々からは「増谷さんの変容や成長がよく分かった」という言葉を頂いた。そうした言葉を返していただき、報告する中で私自身が省察する機会となっていたことに気付かされる。長期実践の中にラウンドテーブルという場が加わったことで、改めて私の実践は価値あるものだと考えることができた。

そんな私の長期実践報告書のタイトルは『省察的実践による学級集団の成長』である。福井大学教職大学院での2年間は、長期インターンシップ、週間カンファレンス、ラウンドテーブルなどを繰り返すという省察的実践を行ってきたことが思い返される。今後、これまでの学びを生かすことができるかどうかは正直わからないが、大学院での学びのおかげで今の私があることは間違いない。教師としての礎を築くことができた教職大学院での学びを「思い出す」ために、切磋琢磨してきた同志と成長した姿で再会するために、今後もラウンドテーブルに足を運ぶことができれば幸いだ。

2017年3月。教員生活に追われている未来の自分へ。教員生活が今から始まる自分より。

実践研究 福井ラウンドテーブルを終えて

福井県立嶺南東特別支援学校 教諭 河端 稔

福井ラウンドテーブルは、今回で5回目の参加となった。毎回参加する度に充実感や満足感でいっぱいになる。それらはお土産のように1つのパッケージとしてもらえるのではなく、コペルニクスの転換であったりその切口となるような違和感であったり、もう少しエッセンスを加えれば自校でも取り組めそうなヒントのようなものである。そして、毎回、他者によって思いがけないところに引っ張られてしまうところも魅力的である。そんな意外性と柔軟性に満ち溢れているところがこのラウンドテーブルの醍醐味だと感じている。

1日目の午前中は「特別企画フォーラム」と「保幼小教育フォーラム」、午後からはZoneDの「授業研究」に参加した。9:30からオリエンテーション、トークセッション、ポスターセッション、シンポジウム、鼎談、フォーラムと過密なタイムテーブルに沿って怒濤のようなメニューが押し寄せてきた。終了時刻の17:40時点では、多くの学びを消化しきれず不確実さと不鮮明さで茫茫たる状態であった。完全に私の受容能力をオーバーしてしまったので、ノートを閉じ学びの記録を一度寝かすことにした。

数日が過ぎ、ノートを開けて学びをなぞっていくと、この1日目の学習プログラム自体に大きな学びがあったことに気づく。「特別企画フォーラム」もZoneD「授業研究」も木村優先生（福井大学教職大学院准教授）が司会進行をされていたのだが、その進め方がとっても斬新であった。「特別企画フォーラム」では、財政教育プログラムに参加した福井県立敦賀高等学校と奈良女子大学附属中等教育学校、静岡県富士市立高等学校の3人の生徒が壇上に上がってトークセッションが行われた。そこで、木村先生から3人の生徒に質問が出された。1番初めに出了された質問は、「この授業に対し、ドラマのタイトルをつけると？」というものであった。すると、高校生からは「素敵な増税♡」「私は何歳？」「今までの自分にさようなら」というようなタイトルが出され、スクリーンに映し出された。そして、木村先生はどうしてそのようなタイトルになったのかを生徒たちに聞いていった。その他にも、「学習

活動の中で一番印象に残っていることは？」「学び取ったことを一言で表現すると？」というような質問が出された。生徒に感じたことを一言で提示してもらい、その背景を探っていくこの方法は、学校の授業で取り組んでもおもしろそうだし、深い学びに繋がると感じた。

ZoneD「授業研究」でも森田史生先生（福井大学附属中学校教諭）、金子奨先生（埼玉県立新座高等学校教諭）、石井恭子先生（玉川大学教授）の3人の先生方が壇上に上がられた。そして、木村先生から「アクティブ・ラーニングとは？」、「カリキュラムマネジメントって何だろう？」というようなテロップがスクリーンに映し出され、それについて鼎談が行われた。ここでも重要となる文字やカギとなる言葉を単語で提示して、これからの見解をそれぞれの先生の視点で切り込んでいってもらう形式であった。これも学校の学部研究会等で真似して取り組んでみてもおもしろいと感じた。

これらは、聞いていた私たちオーディエンスも一緒に考えを深めることができるとも良かったと感じる。なぜそのようなことが可能となったかを考えると、やはり木村先生がファシリテーター的な役割を担い、ファクトは示すが絶対に誘導しないようにし、ニュートラルに考えてもらうことを大切にされたからだろう。これらは、学校の授業においても大切なことで、「教師の役割」として大事なことを再確認できた時間であった。



実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:
Summer Sessions 2017
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル

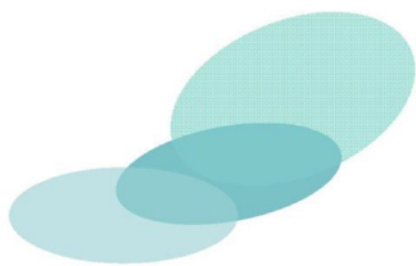
2017 summer sessions

6/23(fri) 17:30-18:40

24(sat) 13:00-17:40

25(sun) 8:20-14:00

福井大学総合研究棟V（教育系1号館） / AOSSA



探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2017.6.23-25

教師教育改革コラボレーション/福井大学教職大学院

大学院教育学研究科教職開発専攻

共催 福井大学高等教育推進センター・教育実践研究フォーラム・社会教育実践研究フォーラム

後援 福井県教育委員会・福井観光コンベンションビューロー

実践研究
福井ラウンドテーブル
2017 summer sessions

6/23(fri)

Pre-session 17:30-18:40
教職大学院におけるプロセスコンサルテーション

6/24(sat) 13:00-17:40

orientation 13:00-13:10 学校・教育・地域を考える4つのアプローチ

- A 学校:子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ ー新しい世代を支えるー
- B 教師 ①教員研修体系の新たな構築と今後の展望「変わる教員研修」
教職大学院と教員研修センターの有機的連携
②これからの学部段階の教員養成を考える
a:教員:実践を聴き、夢を語る b:学部学生:クロスセッション 授業/活動 語ろう・聴こう・出会い直そう
- C コミュニティ:持続可能なコミュニティを培う 何がコミュニティの持続的発展を支えているのか
- D 授業研究:子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織するか

session I 13:10-14:10 実践に学び合う広場 実践の広がりに出会う knowledge fair

session II 14:20-15:50 課題の提起 方向性を探る symposiums

session III 16:00-17:40 テーマ別の話し合い 問いを深める forums

ZONE A 子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ

主旨

これまで Zone A では、「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ」というテーマのもと、「専門職の学び合うコミュニティ」として学校が共有ビジョンのもとで発展していくための、教師の協働の在り方について議論を積み重ね、その重要性を様々な角度から確認してきました。前回 2 月の実践研究福井ラウンドテーブル 2017Spring Sessions では、「支え合うコミュニティに向けて」というサブテーマのもと、幼児教育、初等教育、特別支援教育の視座から「支え合うコミュニティ」の中で特に若い世代の学びと成長をいかに支え促すのかを議論しました。

この議論を受けて、今回の実践研究福井ラウンドテーブル 2017Summer Sessions では、若い世代だけでなく、新たに学校に異動あるいは着任する新たな同僚の学校間文化移行とそこでの文化学習をいかに支え促すのか、その具体的な実践と指針について考える「新しい世代を支える」をサブテーマに設定し、参会者の皆様とともに議論を進め深めていきます。

Session I
(13:10-14:10)

ナレッジ・フェア (ポスターセッション)
福井県内外の幼・小・中・高・特別支援学校

シンポジウム

子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ:新しい世代を支える

Session II
(14:20-15:50)

シンポジスト 長野県伊那市立伊那小学校・教諭 佐々木 英明 氏
同志社中学校・教頭 沼田 和也 氏
コーディネーター 福井大学教職大学院・准教授 木村 優 氏

フォーラム

Session III
(16:00-17:40)

Session II シンポジウムでの議論を受けて、参会者の皆様とともに協働チームで問いと議論を深めていきます。

ZONE B1 教員研修体系の新たな構築と今後の展望「変わる教員研修」 ：教職大学院と教員研修センターの有機的連携

主旨 教員の資質・能力の向上を目指す制度改革については、文部科学省も平成 27 年 1 2 月の中教審の答申において、教育委員会、学校、大学等が目標を共有してお互い連携しながら、次期学習指導要領等に向けて教員に求められる力を効果的に育成できるよう、教育委員会と大学等との協議の場の設置や教員に求められる能力を明確化する教員育成指標、それらを踏まえた研修計画の策定などを実施することとし、教員研修自体の在り方を、「アクティブ・ラーニング」の視点で見直すことなども提言しています。本学教職大学院と福井県教育委員会も、本年度よりこの提言の主旨に賛同し、これまでの教員研修を見直し、新たな体系の構築に協働で取り掛かり始めたところで

す。
こうした教職大学院と自治体の連携の動きは、福井県だけでなく国内各地でも始まっていますが、新しい試みであるだけに、教員の資質・能力の向上を目指してより効果的な研修体系が構築できるよう、試行錯誤しながら、有機的な連携を模索しているというのが現状です。

本シンポジウムでは、連携を始めた国内各地の教職大学院と自治体の関係者から新しい教員研修体系構築の現状を報告していただき、その構築の在り方を検討し合いながら、今後の展望を探っていきたいと考えております。

Session I
(13:10-14:10)

ナレッジ・フェア（ポスターセッション）
福井県教育総合研究所

シンポジウム
教職大学院と教員研修センターの有機的連携

Session II
(14:20-15:50)

| | | |
|----------|------------------|----------|
| シンポジスト | 北海道立教育研究所企画・研修部長 | 中澤 美明 氏 |
| | やまぐち総合教育支援センター | 竹本 芳朗 氏 |
| | 山口大学教職大学院 | 前原 隆志 氏 |
| | 福井県教育総合研究所研修センター | 鈴木 利英 氏 |
| | 福井県立三国高等学校・校長 | 齊川 清一 氏 |
| スーパーバイザー | 文部科学省教職員課課長 | 佐藤 光次郎 氏 |
| コーディネーター | 福井大学教職大学院教授 | 倉見 昇一 氏 |

Session III
(16:00-17:40)

フォーラム
「これからの教員研修の在り方を探る」
Session II シンポジウムでの議論を受けて、参会者の皆様とともに協働チームで問いと議論を深めていきます。

ZONE B2 (b) 学部学生のクロス・セッション 授業/活動 ：語ろう・聴こう・出会い直そう

| | |
|------------------------------|---|
| 主旨 | <p>大学における教員養成をとどのように支え、また今後に向けて発展させていくのか。ZoneB2 では、教員養成に携わる大学教員がこれからの学部における教員養成への夢を当事者としてふくらませていくことためには、教員養成における学びの主体者である学生たちの思いや課題を知る必要があります。</p> <p>こうした問題意識を背景に、前回2月に開催されたラウンドテーブルから、学生たちが「自分たちは、授業や 活動を通して、何を学んでいるのか」を語り合い、聞き合うクロス・セッションが立ち上がりました。自分たちの取り組みをことばにし、また、他大学の学生の語りを聴くことを通して、授業や活動の中に潜在していた意味ある課題が浮かび上がってくることを期待しています。</p> |
| Session I (13:10-14:10) | <p>ナレッジ・フェア (ポスターセッション) 福井県内外の教員養成大学</p> |
| Session II (14:20-15:50) | <p>シンポジウム 小グループ形式で実践交流を行ないます 東京家政大学・富山大学・一宮研伸大学 (中部大)・長崎大学・東北芸術工科大学・福井大学</p> |
| Session III (16:00-17:40) | <p>フォーラム Session2 同様、小グループ形式での実践交流を行ないます。</p> |

ZONE B2 (a) これからの学部段階の教員養成を考える ：実践を聴き、夢を語る

| | |
|----|--|
| 主旨 | <p>教員養成をめぐる制度の見直しへの提起が重ねられ、とりわけ教職免許法の改正にともなうカリキュラムの変更が求められてきています。しかし、長い蓄積の中で培われてきた組織の中で、新しい課題への取り組みを進めていくことには大きな困難がともないます。それぞれの実践と経験を活かした、当事者としての知恵が問われてきていると思います。</p> <p>こうした問題意識を背景とし、昨年6月に開催されたラウンドテーブルから、学部の教員養成に携わる当事者が、互いの取り組みを聞き合い、語り合う新しいセッションが立ち上がりました。大学における教員養成をとどのように支え、また今後に向けて発展させていくのか。さまざまな背景と専門を持ち、学部での教員養成に携わっている 当事者同士、現実の中での互いの取り組みを聞き合い、語り合う場を創っていきたいと思います。</p> <p>前回同様今回も、少人数で多様なメンバーが大学を超えて教員養成の取り組みを聞き合うことを中心に据えたいと思います。それぞれの取り組み、そこでの工夫、あるいは課題や悩みも 含めて共有し学び合いながら、これからの学部における教員養成への夢を、当事者としてふくらませていくことができたいと思います。</p> <p>互いの現実とそこでの取り組みを聞き合うことを通して、また夢を語ることを通して、さまざまなキーワードかがセッションの中で浮かび上がってくる。それをさらに次回のセッションに つないでいきたいと思います。</p> |
|----|--|

Session I
(13:10-14:10)

ナレッジ・フェア（ポスターセッション）
福井県内外の教員養成大学

シンポジウム
小グループで実践交流を行ないます

Session II
(14:20-15:50)

東京家政大学・富山大学・一宮研伸大学（中部大）・静岡大学・長崎大学・
神奈川大学・玉川学園大学・東北芸術工科大学・福井大学

Session III
(16:00-17:40)

フォーラム
Session2 同様、小グループ形式での実践交流を行ないます。

ZONE C 持続可能なコミュニティを培う コミュニティの持続的な発展のために異質との出会いをコーディネートする

主旨

これまで Zone C では、各地のコミュニティで長期にわたる実践の歩みとその展開を、その持続可能性をめぐる課題から検討し続けてきました。前回は、「何がコミュニティの持続的な発展を支えているのか」と題して、スタッフが入れ替わる中で、絶えず発展をし続けている取り組みに焦点を当てて、それらの組織マネジメントやコミュニケーション構造について事例を元に考えを深めました。

しかし、コミュニティの持続的な発展は、構成員の自助努力だけで可能となるのでしょうか。コミュニティ外のメンバーとも接点を持ちながら、自覚的に自身のコミュニティの価値や取り組みを問い直していくことも不可欠ではないでしょうか。

今回の Zone C では、「異質との出会い」をテーマに、コミュニティの持続的な発展のために、コミュニティ外のメンバーとの出会いをいかにコーディネートし、活かしていくかについて考えていきたいと思えます。実際にコミュニティ外の視点でコミュニティの発展に尽力されている方と、その方を自身のコミュニティに迎えて、共にその発展に取り組もうとされている方の双方の方の取り組みを共有し、世代や立場を超えた多様なメンバーで考えを深めていきたいと思えます。

Session I
(13:10-14:10)

ナレッジ・フェア（ポスターセッション）
福井市・越前市の公民館、ふくい市民国際交流協会、探求ネットワーク他

Session II
(14:20-15:50)

シンポジウム

シンポジスト 福井市殿下地区地域おこし協力隊 高橋 要 氏
福井市殿下地区青年グループ d.o.d

（福井市殿下公民館） 堂下 未来 氏

コーディネーター 福井大学教職大学院講師 富永 良史 氏
早稲田大学教授 村田 晶子 氏

Session III
(16:00-17:40)

フォーラム
Session II シンポジウムでの話題提供を受けて、小グループでの実践交流を行います。

ZONE D 子どもと教師の学びを支えるために 授業研究・保育研究をいかに組織するか

主旨

大きな社会の変革が起きつつある中で、教育現場はさまざまな転換を迫られています。今回の学習指導要領改訂の動きの中では、「社会に開かれた教育課程」「カリキュラム・マネジメント」「主体的・対話的で深い学び」といったキーワードが並び、これらを実現するためには「地域と連携」した「チームとしての学校」で「生涯にわたって学び続ける」教師が求められてもいます。こうした中で、授業研究・保育研究は決定的に重要になるといえ、校内・園内で、専門職として協働して学び合う教師集団をいかに組織していくかが問われています。

こうした背景のもと、これまで ZONE D では、子どもと教師の学びを支えるための授業研究について考えてきました。地域や学校の状況が異なる中で、その組織の在り方は多様であり、長い時間をかけて取り組んでいかざるを得ないものと思います。そこで今回も引き続き、学習指導要領改訂を見据えて、子どもと教師の学びを支えるために授業研究・保育研究をいかに組織していったらいいのか、考えていきます。「シンポジウム」では、幅広い校種の先生方に登壇いただき、これから求められる学びの在り方や教師コミュニティの在り方等のいくつかの論点を取り上げて、それぞれが取り組んできたことやその中で掴んできたことをざっくばらんに語り合う形で進めます。

ここで出てきたことを踏まえて「フォーラム」では、参加者がそれぞれの現場で何ができるかを考えていくために、大まかに校種や領域で部屋を分かれます。それぞれの分科会で話題提供者から具体的な実践を簡単に紹介いただいた上で、小グループで話し合い、深めていきたいと思えます。

Session I
(13:10-14:10)

ナレッジ・フェア（ポスターセッション）
福井県内外の幼・小・中・高・特別支援学校

シンポジウム

これからの授業研究・保育研究をいかに組織するのか～次期学習指導要領を見据えて

Session II
(14:20-15:50)

シンポジスト 福井県教育委員会・指導主事 舘 寿子 氏
福井県小浜市立口名田小学校・教諭 正木 啓敬 氏
福井県美浜町立美浜中学校・教諭 八木 康文 氏
コーディネーター 福井大学教職大学院・准教授 岸野 麻衣 氏

フォーラム

多様な授業研究・保育研究から学び合う

Session III
(16:00-17:40)

A 保幼小の実践に学び合う

竹仲美智子氏・吉本典子氏（福井県美浜町立あおなみ保育園・せせらぎ保育園・みずうみ保育園）
上原博光氏（長野県長野市立南部小学校）

B 中高の実践に学び合う

猪 晃一郎氏（長崎県波佐見町立波佐見中学校）
片桐哲也氏（福井県立足羽高等学校）

C 特別支援教育の実践に学び合う

松村千里氏（大野市立児童サービスセンター／平谷子ども発達クリニック）

D 国境を越えて学び合う

フィリピン・オーストラリア・コロンビア・ブータン等からの教員留学生

6/25(sun) 8:20-14:00

SessionIV Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:30-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告Ⅰ 9:00-10:40 ④報告Ⅱ 10:40-11:40 ⑤報告Ⅲ 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

- 申込は上記ホームページから申込書式をダウンロードし、必要事項をご記入の上、メールで送っていただく形で行います。受付期間は6月5日から6月20日を予定しています。
- 6/25の sessionIV の実践報告者を募集しています。申し込みの際にお知らせ下さい。
- 6/25の sessionIV の参加についてのお願いは午前午後全日程（8:20-14:00）の参加をお願いします。ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため8:20-14:00の全日程を6人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として8:20-14:00の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしく願いいたします。

プログラムの変更等があり得ます。

最新の情報を福井大学教職大学院ホームページ <http://www.fu-edu.net/> をご確認ください。

Schedule

- 7/8 Sat 月間合同カンファレンス A（文京・嶺南・東京会場同時開催）
- 7/15 Sat 月間カンファレンス B
- 7/24～ 夏期集中講座開始

【編集後記】

ラウンドテーブルに参加されたお一人おひとりが、何かをすくいとるように思いを持って帰っていかれます。それは明日からの日々どんな風に繋がっていくのでしょうか。皆様からの声（言葉）を編みながら、その続きの話をお聴きしたくなりました。原稿をお寄せくださった皆様ありがとうございました。（荒木・半原）

教職大学院 Newsletter **No.97**

2017.5.13 内報版発行

2017.6.9 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp